

**S H U N K E N   2 0 0 7 - 1 1   3 5 - 0 3**

**駿建**

2007年秋期号 Vol.35 No.3 日本大学工学部建築学科 日本大学短期大学部建設学科

# 日本建築家協会 JIA 新人賞を受賞して

## 小川広次

ミュージックルームよりダイニングルーム、リビングルームを眺める。上部のプロフィリットガラスの中がゲストルーム。



「阿佐谷南の家」が2007年、第18回 JIA 新人賞を戴いた。

これまでどちらかといえば小さな作品を地道に創り続けてきた私が、このように大きな賞を受賞できたことはかけがえのない喜びであり、この場をお借りして関係者の方々にお礼を申し上げたいと思う。

独立して事務所を構えてから早16年が過ぎようとしているが、この年齢になってつくづく思うのは、これまでいかに恵まれた環境で建築と接してこられたかということである。

私が日本大学理工学部建築学科に入学したのは1978年である。当時、非常勤講師として設計製図の授業を受けもたれていた高宮真介先生にご教授いただけことがきっかけで、高宮先生と谷口吉生氏が共同で主宰していた計画・設計工房でアルバイトを始めたのが大学3年生の時だった。資生堂アートハウスのデザインに強く惹かれ憧れていた大学生時代、恐れ多いことに谷口吉生氏のことも、さらには彼の父、谷口吉郎先生のこともよく知らずに飛び込んでいってしまったのである。そして1982年、卒業と同時に同社に入社（その後、計画・設計工房は谷口吉郎建築設計研究所を引き継ぎ谷口建築設計研究所に組織替えとなる）。

入社してから、高宮先生からは「なるべくヨシ（谷口吉生氏のことを高宮先生はこう呼ぶ）からデザインを学びなさい」とアドバイスを受けてきた。その後、数多くのプロジェクトを谷口氏のもとで担当することとなり、谷口建築設計研究所在籍中には5件の美術館の設計を担当した。

入社したての頃は辛かった。当然ながら知らないことばかりである。二人の建築家が何をしたいのだろうと考え悩み、それに自分を順応させることにばかり気が向いてしまっていた。どうやったら二人が気に入るものがで

きるのだろう。ある時、このスタンス自体が誤りであることに気がついた。それは他人が考えていることすべてを、当人と同等に理解することは不可能なことであるという当たり前のことに思い当たったからである。では、その上でどうするのか。

「そうだ、自分の言葉で語ってみよう。自分の考えで表現してみよう」。

それからだろうか。辛くなくなった。考えて悩むことが楽しくなっていった。

父が急逝したため父の建築設計事務所を引き継ぎ、豊田市美術館の基本設計を完了させると同時に1991年に独立をすることになる。自らの事務所を構えてからも在籍中の美術館設計の経歴をかわれ、谷口吉生氏とともに美術館などのプロジェクトに参加する機会が続いた。法隆寺宝物館、ニューヨーク近代美術館、東京倶楽部などである。

ニューヨーク近代美術館、通称 MoMA はコンペから参加し完全に完成するまでに10年の歳月を費やした。2006年の12月にグランドオープンを迎えた MoMA はこれまでに関わった建築の中で最も難しいプロジェクトだった。1939年にフィリップ・グッドウィン／エドワード・デュレル・ストーンによって、当時ブラウン・ストーンと呼ばれる煉瓦色の街に突如として白い伽藍が現れる。その後もフィリップ・ジョンソンやシーザー・ペリによって拡張が行われてきた。その上で私たちが新しい拡張計画の設計者になったのである。私にとってはまるで建築の歴史の教科書そのものであり、これらの歴史を継承しつつ、MoMAの未来を模索するという設計プロセスは難航を極めた。また、このプロジェクトを担当している間に、現地では9.11の事件があり本当に多くのことを考えさせられるきっかけともなった。このプロ

### 筆者略歴

1960年 東京都生まれ  
1982年 日本大学理工学部建築学科卒業（近江研究室）  
1983～92年 株式会社谷口建築設計研究所  
1991年～ 株式会社小川広次建築設計事務所 代表取締役  
2006年～ 日本大学理工学部建築学科 非常勤講師

(写真左) 外観／大通りに面しているため、外部には閉じられた外観となっている。目地型枠による暖かみのあるコンクリート打ち放しと断熱塗料仕上げの白いコンクリートに挿入されたスリットが印象深い。

(写真中左) 夜景外観／4.5mのキャンティレバー部分から内部の光が漏れる。(写真中右) エントランスギャラリー／階段踊り場からの見返し。

(写真右) リビングルーム／4.7mの天井高を持つ大空間。チェロを弾くため、音響設計にも配慮している。

プロジェクトを担当できたことは自分の中でも大きな転機となっていると思う。

そんな経緯もありとてもイレギュラーな形態ではあるが、今も二つの事務所で設計活動をしている。現在、谷口建築設計研究所ではスイスの製薬会社の研究所や、アメリカのアジアソサエティの建物の設計を担当している。今でも苦しいことはある。辛いと思うこともある。でも、自分の言葉で語れる時間は楽しいと感じられる。

主宰する小川広次建築設計事務所では、少人数ではあるがスタッフの協力のもと、住宅規模のプロジェクトをじっくりと進めるようにしている。そんな中「阿佐谷南の家」を設計するチャンスを得た。施主は業界では有名なカリスマ編集者で、知り合いになるきっかけは11年程前に私が設計した住宅の取材をしていただいたことに遡る。どんな有名な建築家であっても設計を依頼できる方なのに、なぜ私に？でも嬉しい。期待に応えられるのかとてつもなく不安ではあるが、とてつもなく嬉しい。だから後先も考えずに即刻お引き受けした。とにかく私の事務所にとって必ずエポックメイキングな仕事となる。スタッフ全員にそう伝え、全力で取り組むことになる。

2003年8月、プログラムが書面で届く。A4版一枚にびっしりと書きつづられた文章には適切な表現で要望が事細かに描かれていた。ただ、最後に一行。「小川さんの傑作でないといやです」というくだりだけはどう実現できるのか。ベストを尽くす以外に道は無い……。

建築を創る上でコミュニケーションは欠かせない。建築行為は一人では完結できないのである。そこで重要になるのが「言葉」である。よく、「言葉」は「言霊」とも言われる。思いが込められているからコミュニケーションが成立するのである。だが、思いが込められているからこそ「言葉」の意味は各々で違ってくる。「言葉」が通じない。とんでもない奴に依頼してしまったと悔やまれたこともあったに違いない。紆余曲折を経て基本設計が完成した時に施主から120点満点という高評価を頂戴できた。これは「言葉」の意味を共有できたという証だと思った。とても嬉しかった。また、これが励みにも

なって私たちは次のステップに進んでいけるのである。

当然ながら、工事の段階に入ると今まで以上にさまざまな人々と関わっていくことになる。ただ、これまでと違うのは物という実在の物質との関わりが加わるということ。心に抱いたイメージを図面化して設計図とし、この図面をもとに工事を行い、最終的にはイメージを物質化する。現実化するというプロセスを経る。だから工事関係者とは図面のみではなく、物を介してコミュニケーションを行う。現物のサンプルを並べ、場合によっては原寸大の模型をつくりコミュニケーションを図る。そしてお互いにイメージを共有できた時に建築はこの大地に実現する。初期のイメージを抱いたままに実現するはずである。

2007年5月、「阿佐谷南の家」は第18回JIA新人賞を受賞した。このことを何よりも施主が喜んでくださった。関係者全員が一生懸命に努力をしたご褒美ですとおっしゃってくださった。

受賞後、ご挨拶に伺った。既に竣工して2年の歳月が過ぎていた。表彰状を前にして初めて施主に言えた。

「やっと与えられたプログラムをすべて完了することができました」と。

私のこれまでの人生は、決して順風満帆だったとは言えない。また、私の子供たちに対して、世間で言う良い父親だったかと問われたら言葉を濁してしまう。しかし建築家だからこそ、これまでの人生で自分が関わってきたモノを見せてやることもできる。それも建築家ならではのだと考えている。

モノづくりを続ける建築家にとって、これからの時代はより多くの障害や苦難にあたることだろう。しかし、「自分がどうしたいのか」と常に自分に対して問いかけ続ければ必ず答えが見つかるはずである。目で見える「建築」も大事だが、目で見えない「建築」をこそ大事にしていきたい。そういう建築家であり続けたい。

(おがわこうじ・非常勤講師)

※第18回JIA新人賞の審査員講評は以下のURLにアクセスすれば見ることができます。<http://www.jia.or.jp/news/index.html> > JIA新人賞 > 審査員講評



撮影：新建築社

# NU建築フォーラムから NU ARCHITECTURE WEEK へ



講演会風景

## 山中新太郎, 末岡佐江子

本学科では、通常の大学教育では伝えることができない実践としての建築への理解と興味を高めることを目的に、1999年より「NU建築フォーラム」を開催してきた。このフォーラムでは、これまでに第一線で活躍する建築家や構造家、技術者、デザイナーなど、32組のプロフェッショナルを呼び、それぞれの視点から実践的な試みを紹介してもらってきた。これらは学生にとって、実践を通じてプロフェッショナルが思考してきたさまざまな知見に触れることができる貴重な場であるだけでなく、自らの学習経験や研究を社会の中で位置づけていく社会と大学教育の接点にもなってきた。しかし、今まではそれぞれ独立したテーマで年4回に分けられて行われていたために、企画の連動性が弱く、学外への情報発信も有効に図れなかった。本年はこうした問題に目を向け、より発展的にNU建築フォーラムを位置づけていくことを目指して、実験的に3つの講演会を連続で開催する形式を採用した。

「NU ARCHITECTURE WEEK」と銘打たれた今回の一連の講演会では、「越える」という共通テーマを掲げ、建築設計、美術、建築史の3つの分野から既存の枠組みを越えて活躍している菊竹清訓氏、中村政人氏、中谷礼仁氏の3氏を招聘した。さらに、4日目には、建築家の赤松佳珠子氏（建築家・Cat）、石黒由紀氏（建築家・石黒由紀建築設計事務所）、平田晃久氏（建築家・平田晃久建築設計事務所）をゲストクリティックに招き、学部生の前期課題の優秀作品に対する公開講評会「SUPER JURY 2007」が行われた。

## 横河健が切り込み、菊竹清訓を検証／NU建築フォーラム—第1日目

日本現代建築史に数々の足跡を残してきた巨匠・菊竹清訓氏を招いて行われた初日の講演会『建築家・菊竹清訓を検証する』は、モデレーターである横河健教授の発案によって従来の講演会とはまったく異なるスタイルのレクチャーとなった。冒頭の第一部では、モデレーターがスライドを使って菊竹氏の初期作から最近作までを紹介。続く第二部で氏を壇上に招き、京都国際会議場やスカイハウス、メタボリズム運動や世界デザイン会議など、代表作や建築史上の出来事などを振りながら、氏の建築理念や設計当時のエピソードなどをインタビューしていった。

通常なら講演者の独壇場となる建築レクチャーだが、この日は講演者とモデレーターの小気味のよい対話によって終止なごやかな雰囲気で行われた。壇上には夏休みを使って大学院生（M1）有志が作成した京都国際会議場コンペ案の模型二体（全体模型と断面模型）も置かれ、氏が模型を指差しながら会議場空間のあり方やコンペでの苦労譚を話す一幕も。菊竹氏は終止おだやかに、そして、率直に自作や自身の建築論を語ったが、そこには歴史を動かしてきた建築家の重みと迫力があつた。

## マクドナルドもアートに—見慣れたモノを異化していく 中村政人の芸術作品／NU建築フォーラム—第2日目

2日目は、国内外のさまざまな現場でアート作品を積極的に作り続けている注目のアーティスト、中村政人氏



講演する菊竹氏



講演する中村氏 (左)



講演する中谷氏 (左)



NU 建築フォーラム第1日目風景

を招いた。『美術家・中村政人を体感する』と題された講演会のモデレーターは、「湯島もみじ」の設計者であり、富山県氷見市でこの夏に行われたアートイベント「ヒミング」にも参加している佐藤慎也助教。代表作でもある「QSC+mV」, 「CVS」, 「メタユニット」などでは、マクドナルドのサインやコンビニエンスストアの電光看板、街路灯などの見慣れた事物が、本来あるべき場所から切り離されて、まったく別の空間に配置されていた。普段は当たり前だと思っていたモノも、見え方や現れ方が変わることによって、そのものが担っていた記号性やモノと人間の関係の中に潜在する既成概念などが問い直され、見るものの感性を揺さぶってきた。

さらに、中村氏がアートを紹介してまちに働きかけた「ヒミング」や「ゼロダテ」などのアートプロジェクトも紹介された。これらの氏の試みは地域や場所のもっている潜在的な可能性を見つけ出し、それらを顕在化させる媒体としてアートを位置づけていることが特徴だ。まちの人たちが気づいていなかったような地域の魅力を、眼力と創意によってアート作品へと昇華させていく手法は、まちづくりや建築設計の手法とも共通するものがある。

### 越境的史学：歴史工学から化モノ論へ／NU 建築フォーラム—第3日目

3日目は、さまざまなメディアで刺激的な建築論を発表している中谷礼仁氏を招いた。『歴史工学とは何か—化モノ論ノート』と題したレクチャーのモデレーターは氏と同世代の佐藤光彦准教授。通常の建築講演会は歴史家がモデレーターになって建築家の話を聞くというスタイルが多いが、今回は主客が逆転。講演では、大阪の長屋の歴史工学的改修プロジェクト「63」や都市に潜在する過去の形質（先行形態）の発見を契機に古墳時代から現代まで連続と続く重層的な都市形態の形成をひも解く「連鎖都市学」、90年の時を越えて今和次郎の足跡を辿る『日本の民家』再訪（INAX 出版『10+1』連載）などが紹介された。いずれのプロジェクトも、いわゆる文献学からは距離を置き、現場やモノから観察されたことを論理的に組み上げていく実証主義的な姿勢が通底し



模型を使って説明する菊竹氏

ている。後半の「化モノ論」では、住宅の中でモノや人間の欲望を納め込んでいる臍的な空間に着目し、人間が本能的に持つ不気味な部分や人間とモノの親密な関係などが、住宅を作り出す力になっているのではないかと指摘した。

### NU ARCHITECTURE WEEK を終えて

今回は3つの講演会とスーパージュリーを、連続4日間で行う初めての試みとなった。連続イベント NU ARCHITECTURE WEEK 全体のコーディネーションは佐藤光彦准教授が担当した。3回の講演会はいずれも内容が充実しており、合計で500名以上の聴講者が集まった。一方で、会場の規模が大きすぎたり、連続開催のために後半に学生の集まりが少なかったりする課題も見えた。今回は、ポスターやチラシ、模型、当日のパンフレット、会場設営など、運営に関わる多くの作業を大学院生(M1)が担った。連続開催ではどうしても裏方の作業が

#### 第33回 NU 建築フォーラム—1

「越える」建築：『建築家・菊竹清訓を検証する』

モデレーター 横河 健

9月26日(水) 17:00～19:30

聴講者 約270名(学外約40名)

○菊竹清訓(きくたけ・きよのり, 建築家)

1928年生まれ 主な作品/スカイハウス、出雲大社庁舎、ホテル東光園、都城市民会館、萩市民館、アクアポリス、江戸東京博物館 等

#### 第33回 NU 建築フォーラム—2

「越える」美術：『美術家・中村政人を体感する』

モデレーター 佐藤慎也

9月27日(木) 17:00～19:30

聴講者 約120名(学外約15名)

○中村政人(なかむら・まさと, 美術家, 東京芸術大学准教授)

1963年生まれ 主な作品/ CVS, QSC+mV, 美術と教育, 湯島もみじ, ヒミング, ゼロダテ 等

#### 第33回 NU 建築フォーラム—3

「越える」史学：『歴史工学とは何か—化モノ論ノート』

モデレーター 佐藤光彦

9月28日(金) 17:00～19:30

聴講者 約140名(学外約20名)

○中谷礼仁(なかにの・りひと, 歴史工学家, 早稲田大学准教授)

1963年生まれ 主な著書/ 国学・明治・建築家, セヴェラルネス—事物連鎖と人間, 近世建築論集, 磯崎新の革命遊戯 等

講演データ

短期間に集中してしまう。大学院生スタッフの献身的な頑張りがなかったら今回の成功はなかったであろう。今回のイベントで彼らの果たした役割は大きい。

大学の個性と魅力がますます問われる時代に入って、大学主催の講演会は、学生への良質な実践教育の場としても、学外へのアピールの場としても、より重要な役割を担ってきているといえる。本年の試みを活かして、来年以降もより実りのある建築フォーラムのあり方を模索していく必要があるだろう。

(やまなかしんたろう・助教)

## SUPER JURY 2007

「SUPER JURY 2007」が9月29日(土)に、駿河台キャンパス1号館CSTホールにて行われた。これは、主に前期設計課題の優秀作品を全学年一堂に集め、講評会を行うというものである。

学部2年生から大学院生までの設計課題優秀作品を26作品、昨年度の卒業設計・修士設計を5作品、デザインワークショップI・II優秀作品を8作品、合計39作品を25日(火)～29日(土)の期間中、CSTギャラリーにて一同に展示し、最終日に2～4年生の課題20作品について、本人による発表とゲストクリティックと非常勤講師による講評会が行われた。ゲストクリティックとして、赤松佳珠子氏、石黒由紀氏、平田晃久氏の3名と、非常勤講師有志として、小宮功先生、高橋真先生、田中雅美先生、村松基安先生の4名にご参加いただき、モデレーターを佐藤光彦准教授が務めた。

講評会後は、2階のカフェテリアに場所を移し、授賞式を兼ねた懇親会が行われた。各賞にはゲストクリティック3名の名前がつけられ、今年は奨励賞も1作品選出された。以下は、受賞者発表の際に述べられた総評と、受賞者へのコメントである。

### ●赤松佳珠子賞：的場弘之（3年）

今日は、2年生から4年生まで縦断的に見せていただいて、いろいろな作品があって、とても面白かったです。2年生でも結構レベルの高いものもあって、講評会は長い時間ではありましたが、結構あっという間に時間が過ぎたという感じです。今日の発表者は狭き門をくぐって出てきたということもあって、それだけレベルが高かったという印象があります。

私の賞は、21世紀図書館の的場君です。ただわれわれの一致した意見としては、プレゼンテーションはまだでした。

もう少し、やろうとしたことをきちんと人に伝えるという訓練を重点的にこれからやってほしい。という今後の期待をこめて、賞をあげたいと思います。

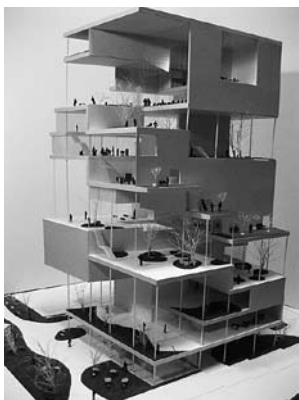
### ●石黒由紀賞：向井正伸（3年）

丹精にできている作品が多く、完成度が高かったと思います。建築をやっていると、楽しいところが1割、大変なところが9割くらいなので、楽しいところを膨らませていくように自分で熱い思いをもって、建築をやってほしいと思います。

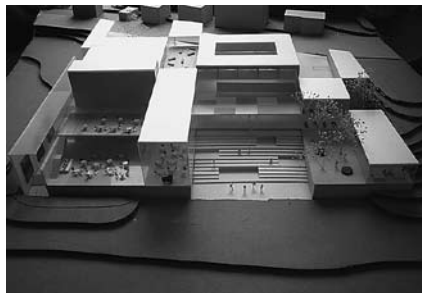
石黒賞は、長者ヶ崎コンプレックスの向井さんです。非常に完成度が高く、そのまま建ちそうな感じで、すごく好印象でした。抑えるところを抑えて、全体のバランスがよいということは、とても大変なことなので、その点を評価したいと思いました。

### ●平田晃久賞：藤原 拓（2年）

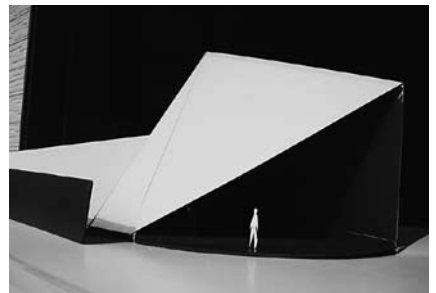
僕が、学生の時のことを思い出していて、それと比べるとレベルの高い作品を見せていただいて、今日はすごく楽しかったです。建築って、そんなに年齢差は関係ないので、学生に対しては基本的にはライバルだと思っているんです。あまり教えている場合ではなくて、うまいことやれると困るなと思っているんです。でも、かといってつまらない建築の世界になるのもいやだなと思っていて、自分勝手な話ですが、頑張り過ぎないくらいにやってもらえると一番いい。でもやっぱりお互い本気



赤松佳珠子賞 的場弘之



石黒由紀賞 向井正伸



平田晃久賞 藤原 拓



講評会風景



ゲストによるクリティック



授賞式風景

モードでやっていきたい。多分、今皆さんの周りにいる人たちが今後すごく貴重な仲間になっていくと思いますので、大事にしてほしいと思います。

僕は、今後の期待も含めて2年生の藤原君に賞をあげたいと思います。新鮮な感じの空間で、素直に魅力的だなと思ったんです。多分最近の建築の傾向だと、ああいう作品はあまり無いですね。逆に2年生だと知らないからかもしれないけど、自分の思ったことをそのまま作っていて、実は建築ってそういう非常に個人的な思い込みみたいなものを、どこまで皆にわかるようにして説得力をもたせていくか、それがきっちりした言葉として発言できたらどんなものでもありなんですよ。何でもありと言うと語弊があるけれど、責任を取るところまでもっていけばありだと思うんです。彼の作品は、何でもありというところまでいっているかはわからないけれども、そうさせてほしいという魅力をもっていたと思っていて、賞をあげたいなと思いました。

● 奨励賞：小林加奈（3年）

僕自身は、全体としてすごくいいかどうかはわからないんですけども、ただあの一枚の書架の絵というのがなんか新鮮だったんですね。何か気づかせてくれたというか、こういう書架あってもいいなと思ったんです。それが、しかも初めてのことだったんです。そういうのってすごく重要で、何か一個のことで気づいたということに意味があるんです。だからそういう意味では、非常に感銘を受けました。それを本当は、もっと形にしてい

くと説得力が出てくると思うんですけど、その気づいた一個ということがすごく大事だということを言いたかったので、奨励賞をあげました。（平田氏）

（すえおかさえこ・助手）

2年	パブリックスペース	藤原 拓, 錦木雄太, 今野和仁, 久保山 武
	住宅	関根拓也, 森 一晃, 西島慧子, 高橋雄也
3年	21世紀図書館	的場弘之, 下大圃将人, 甘粕陽介
	まちのライブラリー	大岡亜沙美, 小林加奈
	長者ヶ崎コンプレックス	的場弘之, 公文直子, 向井正伸
	長者ヶ崎セミナーハウス	緒方大亮, 塚本玲央
4年	外部空間の再構築／駿河台キャンパスの外部空間	秋月孝文, 池田 琢, 土屋敬祐
	蔵の再生／中心市街地の再構築	川上敏宏, 北川健太, 谷口絵梨果
	緑地と建築	石ヶ谷望未, 重矢浩志
	根津：アーティスト・イン・ヴィレッジ	岸 祐太, 古澤修一, 松本 隆
M1	プログラム, ダイアグラム, があたえられたとせよ	米山涼子
	駅空間の再生・再編成	西村朋之
	せんだいメディアテーク・アネックス	榎本裕亮
	建築の翻訳	一條真人
卒業設計（2006年度）		祖父江一宏, 小野志門, 榎本祐亮, 横井創馬
修士設計（2006年度）		山田明里
デザインワークショップⅠ・Ⅱ		小林輝之・田中克茂・田名部 亮, 久保木亮太・小和田俊也・佐藤久子, 公文直子・田中亜利沙, 大澤綾子・加藤友美・下大圃将人, 楠 友介・佐脇三乃里・鈴木亮介, 川島悠都・木川正也, 池田真人・枝 浩司・小澤歌子, 數田宗房・佐久間高志・高橋大樹



奨励賞 小林加奈

出展者リスト



# 原寸大の模型をつくる

## デザインワークショップ I・II 報告

### 佐藤慎也



最優秀賞 小林・田中・田名部案

### 原寸大の模型によるプレゼンテーション

夏季集中授業の「デザインワークショップ I・II」が8月3日（金）～10日（金）の8日間、3年生を中心とした42人の受講者によって行われました。今年度のワークショップは、「都市にとどまる／ながめる／たたずむ」と題した抽象的なテーマを設定し、ユニットマスターに非常勤講師の桑原一郎、手塚義明、村松基安の各氏を迎え、科目担当の佐藤慎也を含めたユニットマスター4人の下で進められました。

今回はすべてのユニットが1つのテーマを共有し、御茶ノ水駅を中心とする半径1キロメートルのエリア内に実在する敷地を各自が選び、「とどまる／ながめる／たたずむ」ための場所に対する提案を行いました。内容については建築物や家具、装置など自由に提案することができましたが、原寸大の模型によってプレゼンテーションを行うことと、それを実際の場所に合成したイメージを作成することが義務付けられました。機能についても、休憩所や待ち合わせ場所といった名前の付いたものに限定せずに目標となる行為だけを設定することで、提案内容に拡がりを与えられることを期待しました。

3年生にとっては初めてのグループ設計課題であることから、アイデアを1つにまとめるために議論を続ける根気強さが要求されました。一方で、原寸大の模型をたった1週間で製作しなければならないことから、体力も必要となりました。それにも関わらず、最終日の講評会ではバラエティに溢れた多くの力作が並びました。

### 原寸大の模型≠実物

義務付けられた模型は原寸大でなければなりませんでしたが、実物をつくる必要はありません。つまり、鉄やコンクリートといった素材を想定した計画であっても、紙や木などで実際の形状をつくるだけでよかったため、提案に用いる素材を選択する可能性が拡がりました。その条件に対し、実際に使用する素材を用いた原寸大模型（つまり実物）を製作するグループもあれば、実際の素材では構造的に成立するものの、模型では強度が足らずに支持することができなくて苦勞したグループもありま

した。こうして原寸大というスケールが、実物を模型として表現することの意味を問い直すことになりました。

佐々木隼・末吉将悟（桑原ユニット）は喫煙者のための木製ベンチを提案し、向き合った2人が実際に座ることができるように木材を組み合わせた実物をつくり出しました。一方、寺元大悟・富田洋平（村松ユニット）は、7号館のあまり知られていないバルコニーの一角に注目し、そこに設置するイスを計画しました。平行な2枚の板にひも状の素材を渡すことで座面を形づくる提案でしたが、強度が不足していたために計画した形状を維持することができませんでした。

そのほか、数田宗房・佐久間高志・高橋大樹（佐藤ユニット）は、秋葉原に大量に設置されているカプセルトイのカプセルがすべてゴミになってしまうことに着目しました。そこで、カプセルを素材としたソファをゴミ回収システムとともに提案し、実際に集めた大量のカプセルを用いて実物をつくっています。今関俊・岩木友佑・太田佳織（佐藤ユニット）は、聖橋のたもとにある小さな公園のようなスペースに、周囲の風景を切り取るための開口部を設けた壁を配置しました。コンクリート製の壁を段ボールに置き換えながらも、実際の大きさを持ったスペースを再現する力作でした。

### 現実に当て嵌められた模型

講評会には、ゲストとして重枝豊准教授、山崎誠子助教が参加し、最優秀賞、ユニットマスター賞、ゲスト賞が選ばれました。

重枝賞に選ばれた川島悠都・木川正也（村松ユニット）は、御茶ノ水駅と水道橋駅の間、神田川沿いの歩道に置くベンチを提案しました。折り曲げられた1枚の板が人型にくり抜かれ、そのまま上を見上げる姿勢で座ることで、頭上に覆い被さる樹木を見上げて楽しむものです。緑豊かな敷地に着目し、樹木に包まれた感覚を得るベンチをつくり出すことに成功しました。山崎賞に選ばれた池田真人・枝浩司・小澤歌子（手塚ユニット）は、秋葉原駅前の広場に林立する樹状オブジェを計画し、回転させて倒すことで葉の部分が座面となる可動式ベンチを提



案しています。紙製の模型は実際に座れないものでしたが、デザインのポイントとなる可動性が再現され、実物を持つてあろう雰囲気を与えていました。

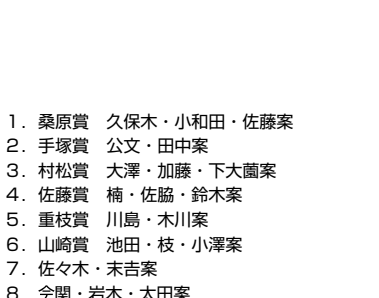
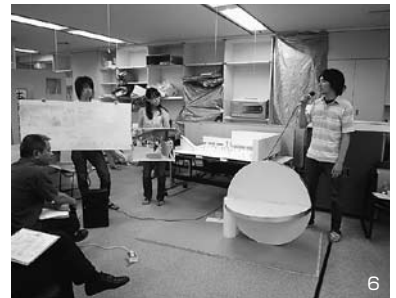
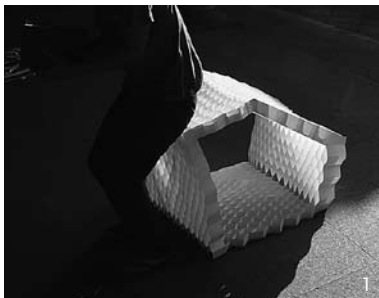
桑原賞には、久保木亮太・小和田俊也・佐藤久子（桑原ユニット）の紙を折り曲げてつくられた家具が選ばれました。具体的な場所を想定した提案ではないものの、持ち運びが可能となる軽量の構造体を持つ家具が評価されました。手塚賞に選ばれた公文直子・田中亜利沙（佐藤ユニット）は、御茶ノ水が大学、古書店、スポーツ用品店、楽器店といった複数の要素が重ね合わされた街であることから、それらの情報を顕在化させる人型サインを提案しました。さまざまな色を持ったサインは、街を彩るオブジェとなるとともにベンチにもなり、そのデザインの完成度が評価されました。村松賞に選ばれた大澤綾子・加藤友美・下大蘭将人（手塚ユニット）は、包装資材として使われるエアパッキン（プチプチ）を公園の遊具と組み合わせることで、仮想的でありながらも魅力あふれる場所を提案しました。佐藤賞には、楠友介・佐脇三乃里・鈴木亮介（桑原ユニット）のガードレールへ

の提案が選ばれました。ガードレールを枝と葉による美しいパターンへと変化させることで、都市の風景を変化させる可能性を持ち得ています。

最優秀賞に選ばれた小林輝之・田中克茂・田名部亮（桑原ユニット）は、工事現場の仮囲いに対する提案を行いました。街で見慣れた仮囲いのほとんどがフラットなものであるのに対し、二次元方向にカーブさせる単純な操作によりイスや台としての利用を提案しています。街にありふれたものに着目し、最低限の形態操作によって機能を生み出す提案は、リアリティの非常に高い作品として評価されました。更に幸運なことに、5号館が改修工事を行っていることから、今村雅樹教授と施工を担当する清水建設の協力により、原寸大の模型を実際の現場に当て嵌めることができました。現実の風景に置かれた原寸大模型の様子を撮影した写真は、今回のワークショップの意図を明確に表したプレゼンテーションであり、その意味でも最優秀賞にふさわしい作品となりました。

（デザインワークショップⅠ・Ⅱ科目担当・

さとうしんや・助教）



1. 桑原賞 久保木・小和田・佐藤案
2. 手塚賞 公文・田中案
3. 村松賞 大澤・加藤・下大蘭案
4. 佐藤賞 楠・佐脇・鈴木案
5. 重枝賞 川島・木川案
6. 山崎賞 池田・枝・小澤案
7. 佐々木・末吉案
8. 今関・岩木・太田案

# 第39回 建築学生海外研修旅行報告

今回の海外研修旅行は、25日間コース（Aコース）と15日間コース（Bコース）を設け実施し、学部3年生から大学院生まで合計81名が参加しました。いずれのコースも盛りだくさんの内容で、すべてを報告しきれませんが、コースの概要や参加学生のレポートを中心に報告します。

研修旅行で感じたこと、学んだことはそれぞれだと思

いますが、実際にその地を訪れ、その建築や都市を体感することの重要性を痛感したことは参加した皆さんに共通だと思います。ぜひ、現地でも感じたことを今後にかけてほしいと思います。

学部1年生や2年生は、ぜひ来年度以降に参加してください。

（川島和彦・専任講師）

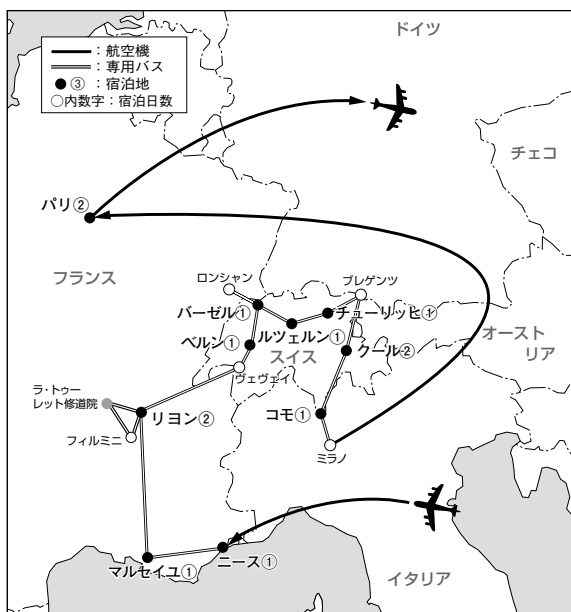
## Aコース まぼろしの建築へ 古代ローマから現代建築の現場まで



ロンシャンの教会にて（Aコース）

〈同行教員〉 佐藤光彦准教授、川島和彦専任講師  
 〈参加学生〉 大澤綾子、太田佳織、大野佑太、岡 宏憲、加藤友美、神崎聡美、北野陽子、小林加奈、佐久間智己、佐藤哉子、柴道翔太郎、清水俊介、清水涼子、神保享平、末吉将悟、鈴木佳美、住吉良子、高崎真理子、高瀬治郎、高橋大樹、田中亜利沙、田中太一、地脇未帆、寺元大悟、富田洋平、中野直樹、中村尚志、中村文彦、福井直輝、藤井さゆり、藤田 伶、松田佳那、森實幸子、安田真弓、山崎 香、綿井菜摘、渡邊直子、鳴嶋 隆、山田泰宏、平田直純、櫻井恵介 以上41名

## Bコース ヨーロッパの都市・建築・文化へ 近代の発祥から現代への建築行脚



建築家 Valerio Olgiati 氏とともに（Bコース）

〈同行教員〉 横河 健教授  
 〈参加学生〉 秋元康宏、秋山智絵美、荒井亮蔵、飯田愛美、市原恵太、岩井悠貴、枝 浩司、大越はるか、岡村彰子、荻野裕行、柿崎大輔、菅 美穂、楠友介、久保木亮太、小林輝之、小宮康輔、近藤里美、齋藤卓馬、酒井恵美、榊原 彩、佐藤久子、鈴木亮介、塚本香奈、林 雅和、原 友里恵、藤村知子、堀内一冬、堀内達朗、松本江美子、真砂 遥、八隅裕介、吉岡真一、吉宮沙織、石井 陽、大島可菜、桐澤 航、櫻田和也、米山涼子、倉沢健一、原田創一 以上40名

## 街全体が一つの建築

大野佑太（3年）

研修旅行を通して多くの建築だけでなく、各都市において街の文化や歴史を体験することができた。旅の序盤からイタリアの街並みの美しさには圧倒された。街の至る所まできちんと舗装がされ、内部空間と外部空間の違いをあまり感じない。日本ではあまり見ることのできない街の統一感や、広場や教会に自然と人が集まる様子はヨーロッパとの文化の違いを特に気づかされ、一つの建物だけでは作ることのできない各都市の独特の街並みは、昔からの歴史と市民の街への思いを感じた。特にサンジミニャーノ、カルカソヌの二つの囲郭都市は街全体が一つの建築にも見える。通常の広がっていく都市とは違い、内部へ完結していく。住民にとって各住居の壁が区切りなのでなく、城壁が領域を決定している。広場や狭い街路において、住民同士のスキンシップがそこには常に見ることができ、とても新鮮な体験であった。この伝統的な街とバルセロナやパリの大都市を比較すると、今までの歴史を背景にして現代社会への移行が見られる。ランドスケープとの関係だけでなく、その中の現代建築のプログラムや機能・デザインの役割の重要性にも気づかされた旅であった。



サンジミニャーノの街並み

## ヨーロッパの旅を終えて

柴道翔太郎（3年）

イタリアに始まり、スイス、フランス、スペインと4カ国を巡り、25日間にわたった今回の海外研修旅行は自分にとって非常に貴重な経験となりました。ヨーロッパの文化や習慣をこの身で感じたこと、本や映像を通してしか見たことのない有名建築家たちの作品や数百年の歴史を刻む古代の建築に直接触れた感動は忘れることはないと思います。

個々の建築だけでなく、それぞれの都市の街並みも強く印象に残るものでした。ローマで、「狭い路地を挟んで背の高い建築物が隙間なく並んでいる」という光景を初めて目にした時は、まるで絵画や映画の世界である

かのように感じたのを覚えています。もともとそのような光景から絵画などが生み出されているのであって、私の感想は本来あるべき姿とは逆になっている気がします。そんな感想をもってしまふほどヨーロッパの街並みは、自分もっていた「当たり前の街並み」とは異質で美しいものでした。

写真はベネチアの路地です。細く迷路のように張り巡らされた路地とそれをつなぐ広場、さらにその街中を巡る運河、水路がつくり出す街並みは数々の都市の中でもひととき印象に残っています。



ベネチアの路地

## きっかけ

藤田 怜（3年）

研修旅行で得た一番の収穫は、「挑戦したい」という熱をもらったことだ。それは建築に対する想いだけではない。研修の25日間は、それまで抱えていた迷い（自分がやりたかったことは何だったのか、これから何を目指していくのか）をこれからのエネルギーに変換する貴重な時間であった。

大聖堂のクーポラにのぼり、ル・トロネで瞑想し、サヴォア邸には多くの発見があった。夜はワインとおいしい食事。数多くの建築や空気感、食事や仲間たちとの会話が、迷いをちっぽけなものに変えていく。やるしかないじゃないか。当たり前だけど割り切れないこと、そんなことをアタマの片隅で考えるきっかけになった。

特に思い出深いのは、ハーレン・ジードルングである。集まり寄り添って暮らす豊かさ、またそれを感じながら個々の生活を楽しむゆりのようなものが、肌から伝わってきた。保存管理された有名建築も良いが、使う人々が建築を生き活きさせることを改めて痛感した。

今回の経験が、思っている以上に肌身に刷り込まれ、自分のこれからの活動に影響を与えていくのではないかと感じる。



背後にたたずむハーレン・ジードルング



## バルセロナでの1日

高瀬治郎（3年）

海外研修での25日間は、毎日新しい発見があって、刺激的な日々だった。中でもバルセロナでの1日は最も印象的だった。

ガウディのサグラダ・ファミリアでは、その大きさと自然をモチーフにした装飾、それから構造は興味深いものだった。細部まで施された装飾は一つのファサードとして見たとき、何かが溶け出したように見えて不思議で異様だった。

同じ日にミースのバルセロナパビリオンを訪れた。近代建築の基本的な建築言語が水平と垂直に構成されているだけで、均質な空間だろうと思っていた。でも実際は今まで体験したことのないような感動的な空間だった。歩くと、見えてくるものや感じる空気が変わっていった。内部と外部の境界がなく、空間が折り重なっている様は魅力的だったし、ガラス越しに見える広々とした周辺の風景や、屋根と壁の間から見える空や緑はとても美しかった。日本建築に少し似た奥行き感があると思った。

25日間でさまざまな時代の建築を見た。時代が変われば当然建築も変わる。大部分の都市は、その中にいくつかの時代の建築が同時に存在し形成されている。それを感じることができた。



バルセロナパビリオンにて

## 海外研修の3つの印象

鳴嶋 隆（4年）

本当にあつという間の25日間、そして密度の濃い時間だった。私自身が海外研修に参加して良かったと思えることが3つある。

まずは、たくさんの方の建築を見ることができたこと。中でも、サンピエトロ大聖堂は最も印象が強い場所だ。スケールの大きさに大きく驚きながらも、聖堂という独特な雰囲気心が落ち着かせてくれた。また、個人では簡単には行けない所も、建築学科の研修旅行だから行けたと思う。例えば、ロンシャン教会などは、駅から離れた山の上であり個人ではなかなか行けない場所だ。また、伊東事務所の方が直々に話をしてくれたモンジュイック2などは貴重な体験だった。

二つ目は、イタリア、フランス、ドイツ、スイス、スペインと5カ国の文化に触れ合えたことだ。シエスタや

13時に閉まってしまうオフィスなど、日本とは大きく違う文化に驚かされた。

最後は、41人の仲間と2人の先生と一緒にヨーロッパに行けたこと。41人+2人がいたから、一緒に楽しみ、学び、感動することができ、より充実した時が送れたと思う。

学生生活最後の夏に25日間の密度の濃い時間を送れたことで、大学生活中の中でももっとも充実した夏休みが送れた。本当に良かった。



モンジュイック2

## 一生に一度の欲張った旅

高崎真理子（3年）

私は以前イタリアのローマ、フィレンツェ、ベネチア、ミラノを訪れたことがあります。その時は初めての海外旅行であったため、目に映るすべてのものにただ感動していましたが、今回は建築を学ぶというテーマでさまざまな都市の街並みを見て回りました。特にイタリアは昔、都市国家であったため、初めて訪れたシエナ、ヴェローナ、ナポリなどでも各地の特色を見ることができ、都市による特徴の違いを存分に楽しめました。また今回の旅行では、コルビュジエが設計した多くの作品に触れてきました。今まで私は近・現代の建築の良さをあまり理解できていませんでしたが、ガイドさんのお話や先生方の解説を聞き、さらにコルビュジエの代表作であるユニテに宿泊してコルビュジエが造り上げた空間を体感する機会が与えられたことによって、親近感をもつことができました。もう一つ、私が行ってみたいと思っていたのはフランスのパリでした。あまり旅行に関心のない母からも「パリはすごくいい街並みだよ」と勧められていたからです。パリは古い建物を残しながらも、それらとうまく調和させるようにきれいに整備された道路が放射線状に広がっていて、その光景を凱旋門の頂上で見た時の感動は一生忘れられないものとなりました。



凱旋門から見たパリの街並み

最後に、この旅行でゴシック・ロマネスク・ルネサンス様式などのさまざまな教会を見てきました。私は中高6年間キリスト教主義の学校に通っていたため、久しぶりにキリスト教を身近に感じ、かつての礼拝を思い出しました。そしてこれらの素晴らしい教会の中で建築に対する自分の考え方など、自分自身を見つめることができました。25日間という長い期間の中で貴重な経験ができて良かったと思います。

## Bコース

### 充実した日々

岩井悠貴（3年）

すごい！ ル・トロネ修道院を見たとき私が感じたものである。人間が本当に素晴らしいものを見たときや体験したとき、この言葉しか出なくなる気持ちがわかった。そこに立つだけで目に見えないものを体で感じ、不思議な感覚に包まれた気がした。それぞれの地域に行き感じたことは、そこに住んでいる人々が自分の街を誇りに思い、大切にし、街を理解し、文化を大切にし、建築家を理解し、誇りに感じているのではないかと思う。このような気持ちが美しい街並みを作りだし、建築を作っているのだと思う。そしてこのような環境が、多くの巨匠を生み出し、立派な建築を作るのではないか。建築家も文化を大切に、後世に伝えようとしたり、新しい文化を築こうとしているのをしみじみと感じた。建築家と人々と文化、この3つがお互いに理解し合っているからこそ、素晴らしい建築が生まれるものと感じた。

ニースから始まり、パリで終わるといった普通では体験できないようなことをたった2週間で回り、多くの建築物を見て、文化に触れ合ってきた、この2週間はとても充実したものになり、私に多くの刺激を与えてくれた。



ル・トロネ修道院

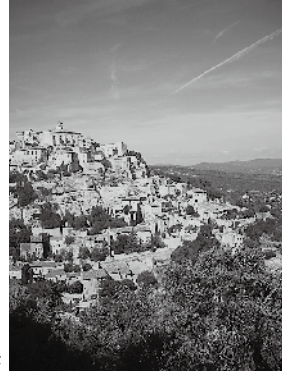
### 研修旅行を終えて

吉宮沙織（3年）

ヨーロッパに行ってきました。約半月となる旅路は長いようでもあり短いようでもあり、いろんなことを考えたような、はたまた初めて見る

もの聞くもの体験するものにただただ圧倒されていたけだったような。今考えてみてもどうにも答えは出ず、この体験の貴重さが本当の意味で理解できるのはもう少し先のような気がします。

私が一番印象に残っているのは、各地の街並みです。色合いや高さといった面から見ても家や公共建築一つ一つが調和しているところが多かったです。また、古く厳めしい風合いのドアにテンキーロックが付いていたり、外観からは想像がつかないほど室内が最新の設備だったり、「古いものも大切にしていこう」という姿勢を感じることができました。これは、総じて人々の自分たちの住む街への意識が高いことの表れではないかと思えます。当たり前だけど大切なこと。スクラップアンドビルドとよく言われるのが日本の建築体制ですが、このような姿勢は私たちも見習わなければいけないと感じました。



山岳都市ゴルド

### ヴァレリオ・オルジアッティ

塚本香奈（3年）

初めてのヨーロッパ。見るもの、触れるものすべてが新鮮で衝撃的だった。ヨーロッパの旧市街は歴史を感じたし、その空は日本にいる時よりも高く、青く見えた。2週間の間にこんなに多くの建築を見たのは初めてだったし、とても充実した、あつという間の2週間だった。建築を見るだけではなく、その建築の周りの環境・人々の生活を見ながら学べたことは、雑誌の写真や図面だけでは学べないことで、自分にとってとても貴重な経験になったと思う。一番印象に残っていることは、スイスの建築家であるヴァレリオ・オルジアッティに会えたこと、まだ完成したばかりの音楽家のためのアトリエを見せてもらったことだ。光の入り方や中庭はとても素敵だったし、オルジアッティの考え方はとても勉強になった。



音楽家のためのアトリエ

## 日常の風景

藤村知子（3年）

この風景、本の写真で見た……！本で見ていた建物や風景の中に自分がある！実際に空気を感じ、手で触れる。本の中ではすべてが同じカラーで並べられ、同じ文字体で語られる。だが建築一つ一つにそれぞれの物語・時間があり、空気がある……本では読みとれないものばかり経験することができた。本ではわからない日常を見ることができたのが一番の収穫。

ユニテ・ダビタシオンでは屋上のプールで思い思いの時間を過ごす人々、コルビュジェのデザインしたイスで遊ぶ現地の子どもたち……。こんな環境の中で生活できたらうやましいなと思ったが、それがどんなに有名なものでもそこで生活している人々や子どもたちにとってはただの生活の一部。建築の勉強をしている私たちにとっては、すごいものであったり、カメラを向けるものであっても、そこで生活している人々にとっては日常にあるものにすぎないのだ。人々に必要とされ、生活の一部となり、建物が日常に溶けこんでいる。すごく大切なことだと思う。そういった建築が街に、世界に、歴史に残っていくんだらう。この2週間、まとめきれないけど……

感動！

ユニテ・ダビタシオンの日常



## 本の世界へ

菅 美穂（3年）

初めての海外。すべてが新鮮で、今まで本や映像でしか見たことがない建築を実際に見て、触って、空間を感じる事ができて、自分にとってとても良い経験になったと思う。写真や言葉、図面ではわからなかった空間を体感できて感動した。ただ、「すごい」としか表現する言葉が見つからないほど綺麗な建築に、皆が上を見上げながら口を開けている風景には少し笑えた。コルビュジェの光の取り方、ピーター・ズントーの素材感へのこだわりなど、学ぶものがたくさんあった。学ぶことが多すぎて旅の最後は頭がパンクしそうだった。多くの写真を撮って帰ったものの、そこには写っていない本物の空間や空気を体感したからこそ自分の本当の知識となったのだと思う。

そして改めて思い知らされたのが、ヨーロッパでは、建築に詳しくない人でもそれなりの教養があるというこ

とだ。自分が暮らしている家、街について少なからず基本的な建築知識をもっている人が多い。建築物の貴重さを知った上で、そこに住み大切に使っているのである。日本はどうだろうか？私は、どうだろうか？ヨーロッパ人の、建築に刻まれた歴史を大切にすることは、あまり日本人にはないと思う。建築だけではなく歴史や文化について、まだまだ勉強不足だと感じた旅行だった。

ロンシャンの教会



## スイスを満喫

飯田愛美（3年）

初めてのヨーロッパ、中でも一番印象に残っているのがスイスでの自由研修である。4人でベネディクト教会に向けてホテルを出た私たちは電車で揺られること1時間。そこからバスに乗り継ぐはずが、バス停が見つからず、登山家の女性2人組に尋ねたところ同じバスに乗るといふ。一緒に話をしながらバスを待った。スイスでは3カ国以上話せないと就職できないということで、彼女たちの英語も聞き取りやすかった。そして、やってきたのはバスというよりワゴン車？2人に話しかけていなかったら絶対わからなかった。バスを降りた所から山道を徒歩で約1時間。やっと見えてきたのは小さな村。そこに素朴にたたずむのがベネディクト教会である。小さな木をうろこ状に張った外観はとても村に馴染んでいた。道ではテニスを楽しむ老夫婦。長時間苦労してでも行って良かったと思える、そんな教会だった。帰りはバスもなく徒歩で駅を探すこと1時間半。途中、道に迷い草原を歩くこともあったけれど、スイスを満喫できる1日であった。行った国、立ち寄った都市それぞれの文化、習慣に触れ、建築をその土地の人々の目線になって実感できる、そんな15日間だった。

聖ベネディクト教会





# オリエンテーション報告

中田善久



BDS 柏の杜 (A コース)

建築学科2年生を対象としたオリエンテーションが、7月7日(土)に実施されました。この企画の目的は、関東近郊の建築施設の見学を通して、専門的な視点から建築を勉強してもらうとともに、教員と学生の親睦を深めるために毎年行われている行事です。企画された9コースは、各先生の専門性が活かされたものとなっており、今後の学習に大いに参考になったと確信しています。A～Fコースまでは貸切バスで、G、Hコースは公共交通機関を利用して見学場所を移動しました。

見学先は、最近話題の建築から歴史的建造物、工場、美術館、再開発現場とバラエティに富んでおりますが、これらは、すべて各コースの先生方のオリジナル企画です。

当日は、見学先で行われるOBの方々や施設の方々、また教員による専門的な説明に、熱心に聞き入る姿、教員とふれあい楽しむ姿も印象的でした。実際に建築空間を体験することで、より一層建築に興味がわいてきたのではないのでしょうか。

今年の特徴としては、例年に比べて、現場見学を行うコースが多く見られたことが特徴的です。今回のオリエンテーションにより、普段の授業とは違うことが得られ、よい経験になり、それぞれのコースで成果が十分に得られたと思います。

今回のオリエンテーションを通して、皆さんが「建築」に対して思ったこと、考えたこと、今後の勉強に役立ててもらいたいと思います。

(2年クラス担任・なかたよしひさ・准教授)

<p>A コース『デザインとテクノロジーをめぐる七タツアー' 07』 BDS 柏の杜, さいたまスーパーアリーナ, 成蹊大学情報図書館, 六本木ヒルズ 齋藤公男, 岡田 章, 宮里直也非常勤講師</p>
<p>B コース『都心部の開発事例をめぐる』 晴海トリトンスクエア, 豊洲埠頭付近, アーバンドックららぽーと豊洲, 霞ヶ関R7プロジェクト 根上彰生, 三橋博巳, 宇崎崎勝也, 川島和彦, 柳田 武</p>
<p>C コース『建築の音環境計画を考えよう』 聖学院大学礼拝堂・講堂, 光和小学校, 所沢市民体育館 井上勝夫, 半貫敏夫, 橋本 修, 富田隆太, 小久保 彰, 吉見佳代子</p>
<p>D コース『谷口吉郎とエコファクチュリングをめぐる秩父ツアー』 長瀬石置, 秩父太平洋セメント(株) 秩父工場, 浦山ダム 宇杉和夫, 中田善久, 飛坂基夫非常勤講師</p>
<p>E-1 コース『神奈川美術館ツアー』 横須賀美術館, 神奈川県立近代美術館 葉山館, 神奈川県立近代美術館 鎌倉館 今村雅樹, 本杉省三, 横河 健, 佐藤光彦, 山中新太郎</p>
<p>E-2 コース『神奈川美術館ツアー』 神奈川県立近代美術館 鎌倉館, 神奈川県立近代美術館 葉山館, 横須賀美術館 関口克明, 渡辺富雄, 佐藤慎也, 八藤後 猛</p>
<p>F コース『関東シルクロードを見る —富岡製糸所と歓喜院の修理工事現場—』 富岡製糸所, 歓喜院 片桐正夫, 大川三雄, 重枝 豊</p>
<p>G コース『横浜で現場を見よう—環境・設備を中心に—』 4階建て事務所ビル工事現場, 横須賀美術館 早川 真</p>
<p>H コース『都市防火と江戸文化を学ぶ下町ツアー』 東京都消防庁本所防災館, 江戸東京博物館 安達俊夫, 白井伸明, 山田雅一, 田嶋和樹</p>



BDS 柏の杜 (A コース)



浦山ダム (D コース)



横須賀美術館 (E-1 コース)



# 2007年度 日本建築学会大会(九州)

## 建築学科教室関係者発表論文リスト

○印 発表者

### 材料施工

1008 各種要因が高強度コンクリートを用いた模擬柱部材のコア強度に及ぼす影響 その1 実験概要および温度性状の検討 ○平野 学 (ものづくり大)・中田善久・大木崇輔・大塚秀三・毛見虎雄

1009 各種要因が高強度コンクリートを用いた模擬柱部材のコア強度に及ぼす影響 その3 コア強度に関する検討 ○中田善久 (日本大)・大木崇輔・大塚秀三・平野 学・毛見虎雄

1024 高強度コンクリートのポンプ圧送前後の品質変化に関する研究 その1 文献調査の概要 ○染谷直己 (ものづくり大)・澤本武博・中田善久・大塚秀三・岡本圭市・毛見虎雄

1025 高強度コンクリートのポンプ圧送前後の品質変化に関する研究 その3 配管を用いた長距離圧送による実験的検討 ○大塚秀三 (ものづくり大)・中田善久・岡本圭市・染谷直己・澤本武博・毛見虎雄

1030 単位水量の違いが高強度コンクリートの諸性質に及ぼす影響 その1 実験概要およびスランプ・スランプフロー ○斉藤丈士 (内山アドバンス)・中田善久・女屋英明・春山信人・大塚秀三・藤井和俊

1031 単位水量の違いが高強度コンクリートの諸性質に及ぼす影響 その2 フレッシュコンクリートの性状に関する検討 ○女屋英明 (内山アドバンス)・中田善久・斉藤丈士・大塚秀三・春山信人・藤井和俊

1032 単位水量の違いが高強度コンクリートの諸性質に及ぼす影響 その3 硬化コンクリートの性状に関する検討 ○春山信人 (フジミ工研)・中田善久・斉藤丈士・女屋英明・大塚秀三・藤井和俊

1039 温水養生による各種セメントを用いた高強度コンクリートの圧縮強度の早期判定に関する研究 粗骨材の岩種の違いが試験結果に及ぼす影響 ○森田鉄也 (ものづくり大)・飛坂基夫・中田善久・大塚秀三

1100 フレッシュコンクリート中の水の塩化物イオン濃度試験における試料採取方法に関する検討 その3 希釈倍率、試料液の抽出方法と塩化物イオン濃度試験方法の違いが試験結果に及ぼす影響 ○長井義徳 (太平洋マテリアル)・棚野博之・中田善久・鈴木澄江・瀬古繁喜・斉藤丈士

1106 衝撃弾性波によるコンクリートの非破壊圧縮強度推定法に関する研究 表面の乾燥が構造体コンクリートの弾性波速度に及ぼす影響 ○立見栄司 (三井住友建設)・中田善久・清水五郎・大塚秀三

1219 昭和基地で観測隊によって打設されたアルミナセメントコンクリートの経年変化と強度推定について ○内藤正昭 (日本大短大)

1274 戻りコンクリートを再利用したポンプ圧送用モルタルの実用化に関する研究 その9 再生モルタルの製造及び貯蔵方法の検討 ○小田英樹 (山宗化学)・和田美佐雄・和田平作・

小宮政光・高橋俊夫・女屋英明・中田善久・毛見虎雄・緑川雅之・大塚秀三

1275 戻りコンクリートを再利用したポンプ圧送用モルタルの実用化に関する研究 その10 再生モルタルの凝結遅延性に及ぼす要因の検討 ○高野 肇 (山宗化学)・和田美佐雄・和田平作・小宮政光・高橋俊夫・湯本哲也・女屋英明・中田善久・毛見虎雄・大塚秀三

1276 戻りコンクリートを再利用したポンプ圧送用モルタルの実用化に関する研究 その11 実機製造により18時間経過した再生モルタルの性状 ○湯本哲也 (和田砂利商会)・和田美佐雄・和田平作・小宮政光・高橋俊夫・福島圭一・女屋英明・中田善久・毛見虎雄・大塚秀三

1277 戻りコンクリートを再利用したポンプ圧送用モルタルの実用化に関する研究 その12 再生モルタルの構造体コンクリートに及ぼす影響 ○福島圭一 (和田砂利商会)・和田美佐雄・和田平作・小宮政光・高橋俊夫・湯本哲也・女屋英明・中田善久・毛見虎雄・大塚秀三

1303 養生条件の違いが硬化コンクリートの単位セメント量試験に及ぼす影響 5年間養生した水和セメントによる強熱減量および溶解量の検討 ○須藤絵美 (内山アドバンス)・中田善久・笠井芳夫

1331 溶融スラグ細骨材の左官用モルタルへの適用に関する基礎的研究 その4 溶融スラグ細骨材の品質およびこれを用いたモルタルの調合 ○赤石裕一 (日本大)・松井 勇・中田善久・高橋宏樹・落部鮎美・田辺英男・伊藤 学・鈴木大介・菅田雅裕

1332 溶融スラグ細骨材の左官用モルタルへの適用に関する基礎的研究 その5 溶融スラグ細骨材を用いたモルタルのフレッシュ性状および強度性状 ○鈴木大介 (山宗化学)・松井 勇・中田善久・高橋宏樹・落部鮎美・田辺英男・伊藤 学・赤石裕一・菅田雅裕

1333 溶融スラグ細骨材の左官用モルタルへの適用に関する基礎的研究 その6 溶融スラグ細骨材を用いたモルタルの作業性の検討 ○伊藤 学 (日本化成)・田辺英男・赤石裕一・鈴木大介・落部鮎美・高橋宏樹・中田善久・松井 勇・菅田雅裕

1588 型わくの転用に伴う合板およびコンクリート表面の品質変化 ○久保田英樹 (ものづくり大)・中田善久・大塚秀三・毛見虎雄

### 構造 I, II, III, IV

20018 床下空間の空隙率に着目した高床式建物模型周囲の吹きだまりに関する風洞実験的研究 ○桑野克彰 (日本大)・佐藤寿樹・高橋弘樹・半貫敏夫

20233 土被り圧の減少に伴う粘性土の水平土圧変化に関する研究 ○木原朋広 (ハウズプラス住宅保証)・ 實松俊明・下村修一・安達俊夫・山田雅一

- 20243 改良地盤上に支持された基礎ブロックの起振実験  
その8 起振実験および地震観測結果の再考察 ○下村幸男(日本大短大)・池田能夫・酒匂教明・川村政史・石丸辰治
- 20331 サブストラクチャ・オンライン応答実験による建物と地盤の動的相互作用に関する研究 ○田口智也(日本大大学院)・安達俊夫・松原宗佑
- 20351 セメント系砂質改良土の強度・変形特性 その11 破壊規準 ○山田雅一(日本大)・安達俊夫・太田 宏
- 20352 セメント系砂質改良土の強度・変形特性 その12 長期材齢における一軸圧縮強度の推定方法 ○太田 宏(日本大大学院)・山田雅一・安達俊夫
- 20421 ドーム型張弦シザース構造の構造特性に関する基礎的研究 その1 ドーム型張弦シザース構造の提案 ○櫻井優貴(山下設計)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・高橋厚人
- 20422 ドーム型張弦シザース構造の構造特性に関する基礎的研究 その2 等価断面力による荷重抵抗メカニズムの把握 ○高橋厚人(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・櫻井優貴
- 20423 展開式立方八面体(Cu-ron)の力学特性に関する基礎的研究 施工性向上に着目したジョイントの提案 ○竹内義典(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・森山卓也
- 20426 テンセグリック式切頂二十面体の提案と仮設空間への適用性について その1 構造システムの提案, 試行建設および風洞実験について ○森山卓也(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・森永信行
- 20427 テンセグリック式切頂二十面体の提案と仮設空間への適用性について その2 基本的構造性能の把握 ○森永信行(なわけんジム)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・森山卓也
- 20456 ETFE フィルムの張力膜構造への適用性に関する基礎的研究 ばねストラット式張力膜構造の提案 ○水野公義(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也
- 20457 4点突上げ式ホルン型張力膜構造のボンディング現象に関する基礎的研究 進行性ボンディング現象の実験的検討 ○川又哲也(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・韓 永輝
- 20458 4点突上げ式ホルン型張力膜構造のボンディング現象に関する基礎的研究 その2 数値解析による基本性状の把握 ○韓 永輝(織本構造設計)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・永井佑季
- 20460 レンズ型二重空気膜構造の強風時の構造挙動について その1 膜面の風圧測定と静的応答性状 ○藤川英哲(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・宮下正人
- 20461 レンズ型二重空気膜構造の強風時の構造挙動について その2 動的応答解析手法の提案および柔模型を用いた風洞実験 ○宮下正人(三菱地所設計)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・水野公義
- 20462 ホルン型張力膜屋根の風荷重に関する基礎的研究 ホルン型ユニットの連結配置の影響 ○永井佑季(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・吉野誠一・大森慎司
- 20463 片持式スタンドルーフの空力特性に関する基礎的研究 その1 風洞実験結果と数値流体解析結果の比較 ○吉野誠一(梅沢建築構造研究所)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・大森慎司・永井佑季
- 20464 片持式スタンドルーフの空力特性に関する基礎的研究 その2 屋根形状・スタンドの影響 ○小野 晋(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・吉野誠一・大森慎司
- 20465 片持式スタンドルーフの空力特性に関する基礎的研究 その3 風荷重低減方法の提案 ○大森慎司(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・吉野誠一・永井佑季
- 20469 集積型テンションヴォールト構造の構造特性に関する研究 その1 構造システムの提案とテンション材の配置による影響 ○藤原圭吾(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・廣石秀造
- 20470 集積型テンションヴォールト構造の構造特性に関する研究 その2 断面形状による影響と実大規模への適用 ○廣石秀造(構造計画プラスワン)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・藤木瑛子
- 20471 テンション材のアイエンド金物の強度に関する実験的研究 その1 設計手法の現状と基本力学性状の把握 ○柴山裕則(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・瀧口真衣子
- 20472 テンション材のアイエンド金物の強度に関する実験的研究 その2 金物形状による破壊性状の変化 ○瀧口真衣子(ピーディーシステム)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・柴山裕則
- 21333 学校施設における災害時の情報伝達システムの確保に関する研究 その5 千代田区の防災計画 ○酒匂教明(日本大短大)・安達 洋・安達俊夫・木原雅巳・田嶋和樹・仁平瑛士
- 21334 学校施設における災害時の情報伝達システムの確保に関する研究 その6 東京・丸の内地区の防災計画 ○大東宗幸(日本大大学院)・安達 洋・安達俊夫・木原雅巳・田嶋和樹・酒匂教明・仁平瑛士
- 21355 モード制御によるBMD設計法に関する研究 ○石丸辰治(日本大)・宮島洋平・牛坂伸也
- 21418 DMDを用いたトグル型制震システム その1 実大振動実験結果について ○宮島洋平(i2S2)・石丸辰治・秦 一平
- 21515 中間階免震を採用した共同住宅の免震改修 その1 性能図表を用いた性能設計 ○齊木健司(三井住友建設)・光阪勇治・古橋 剛・大杉文哉
- 21521 DM効果を利用した免震システムに関する基礎的研究 その1 DMVダンパーの性能試験 ○柳崎尚輝(日本大)・秦 一平・石丸辰治・古橋 剛
- 21522 DM効果を利用した免震システムに関する研究 その2 DMを有する免震システムの開発 ○秦 一平(日本大)・石丸辰治・柳崎尚輝
- 22158 伝統構法で建てられた鐘樓の制震改修について その1 制震改修の概要 ○魚津忠弘(魚津社寺工務店)・石垣秀典・石丸辰治
- 22159 伝統構法で建てられた鐘樓の制震改修について その2 制震改修後の性能に関する検討 ○石垣秀典(ハウスプラス住宅保証)・魚津忠弘・石丸辰治
- 22364 高軸力下における鋼構造露出型ピン柱脚の地震時挙動 ○中島 敏(鹿島建設)・半貫敏夫・秋山 宏
- 22384 実大鋼構造柱梁接合部の延性破壊—脆性破壊遷移実験 その4 接合部要素破壊実験 ○新井佑一郎(日本大大学院)・半貫敏夫・秋山 宏
- 22508 第1層柱脚が降伏する梁降伏型多層骨組の基準損傷分布則 ○小久保 彰(日本大大学院)・半貫敏夫・秋山 宏
- 22511 スリップ型復元力特性の柱脚を有する鋼構造梁降伏型魚骨骨組における最適強度分布 ○柳田佳伸(日本大)・半貫敏夫・秋山 宏
- 23011 耐震補強接合部における性能評価実験と解析的検証 その1 コンクリート—グラウト間におけるせん断挙動 ○増田久美子(日本大大学院)・宮崎紘光・藤城好将・横内 基・北嶋圭二・田嶋和樹・白井伸明

23012 耐震補強接合部における性能評価実験と解析的検証  
その2 鋼板-グラウト間におけるせん断挙動 ○宮崎紘光(日本  
大大学院)・増田久美子・藤城好将・横内 基・北嶋圭二・田  
嶋和樹・白井伸明

23013 耐震補強接合部における性能評価実験及び解析的検証  
その3 補強接合部におけるせん断抵抗機構の解析的検証  
○藤城好将(風間組)・宮崎紘光・増田久美子・横内 基・北嶋  
圭二・田嶋和樹・白井伸明

23037 廃棄物の基本物性と構造物への適用性評価に関する  
研究 その1 複合材置換率(Type VII) ○佐藤真介(商報舎)・  
岡村武士・岩田成子

23038 廃棄物の基本物性と構造物への適用性評価に関する  
研究 その2 細孔径と細孔構造 ○岩田成子(日本大)・岡村  
武士・佐藤真介

23064 3次元FEMによるRC造柱梁接合部に関する解析  
モデル確立へのアプローチ その1 実験概要と基本解析モデ  
ルの確認 ○白井伸明(日本大)・田嶋和樹・橋本 浩

23065 3次元FEMによるRC造柱梁接合部に関する解析  
モデル確立へのアプローチ その2 要素分割および切削鉄筋  
並びに付着すべりの検討 ○田嶋和樹(日本大)・橋本 浩・白  
井伸明

23066 3次元FEMによるRC造柱梁接合部に関する解析  
モデル確立へのアプローチ その3 付着応力度と圧縮強度低  
減の検討および標準モデルの提案 ○橋本 浩(日本大大学院)・  
白井伸明・田嶋和樹

23067 ファイバーモデルを用いた偏心RC造3層骨組の動  
的ねじれ挙動に関する解析的検討 その1 解析概要とねじれ  
復元力特性の検討 ○今井 究(日本大大学院)・河村 準・田  
嶋和樹・白井伸明

23068 ファイバーモデルを用いた偏心RC造3層骨組の動  
的ねじれ挙動に関する解析的検討 その2 解析結果と仮想偏  
心骨組によるねじれ応答の検討 ○河村 準(トータル・イン  
フォメーション・サービス)・今井 究・田嶋和樹・白井伸明

23087 鉄筋コンクリート梁のエネルギー吸収特性に関する  
実験的研究 ○芹澤次郎(西松建設)・半貫敏夫・秋山 宏

23104 開孔補強筋を使用したRC造有孔梁のせん断性状に  
関する実験研究 その1 実験概要及び開孔補強筋偏在配置に  
よる破壊性状への影響 ○三澤智史(東京工業大)・青田知己・  
香取慶一・三橋博巳・林 静雄

23177 スキャナを用いた変位およびひび割れ幅計測結果に  
基づくRC部材の損傷評価 その1 デジタル画像による変形  
計測の精度検証 ○石森昭行(日本大大学院)・杉 太地・田嶋  
和樹・白井伸明

23178 スキャナを用いた変位およびひび割れ幅計測結果に  
基づくRC部材の損傷評価 その2 せん断ひび割れ幅-せん  
断変形関係の定量的評価モデルの提案 ○杉 太地(三菱電機)・  
石森昭行・田嶋和樹・白井伸明

## 環境工学 I, II

40011 身体障害者の温熱環境に関する研究 XVII 頸髄損傷者  
の体温調節機能の特性 ○三上功生(東京理科大)・青木和夫・  
蜂巣浩生・武田 仁

40089 床仕上げ構造の床衝撃音レベル低減量の実験室測定  
方法について ○井上勝夫(日本大)・岡岡正人

40098 衝撃力特性(1)と(2)による床衝撃音レベルの対応性に  
関する検討 ○稲留康一(奥村組)・井上勝夫

40101 スラブの振動特性を考慮した乾式二重床の設置方法  
の検討 ○奥村晃史(日本大大学院)・山中一生・井上勝夫・富

田隆太

40104 歩行感からみた床仕上げ材のかたさ評価に関する検  
討 ○渡邊香保里(日本大大学院)・井上勝夫・富田隆太・渡部  
和良

40106 集合住宅の音環境を対象とした住まい方に関する居  
住者意識 住宅購入時の消費者要求と住宅性能表示制度:その  
10 ○野村奈央(日本大大学院)・井上勝夫・大室諒知

40107 集合住宅における住まい方の改善による発生音レ  
ベルの低減量に関する検討 ○大室諒知(日本大大学院)・井上勝  
夫・野村奈央

40119 円形音場における高密度散乱体を用いた拡散効果の  
検討 ○堀尾貞治(日本大大学院)・関口克明・羽入敏樹・星  
和磨

40136 上方反射音と側方反射音による空間印象の差異  
○佐藤瑠美(日本大大学院)・関口克明・羽入敏樹

40137 「音の抜け」に着目した演奏のしやすさに関するア  
ンケート調査 ○生方秀行(日本大大学院)・羽入敏樹・関口克明

40138 騒音下における反射音の初期と後期のエネルギーバ  
ランスが音声聴取に与える影響について ○小林秀彰(三井住  
友建設)・橋本 修・井上勝夫

40140 講演時における話者の「話しにくさ」に寄与する要  
因 ○小林 彩(日本大大学院)・橋本 修・井上勝夫

40142 騒音下におけるマスクラウドネス評価を用いた拡  
声音制御についての基礎的検討 ○関根嘉昭(日本大大学院)・  
橋本 修・井上勝夫・大澤邦昭

40156 人の動作及びボール衝撃による床振動応答加速度の  
検討 床振動測定用標準衝撃源としてのボールの有用性に関す  
る研究:その1 ○富田隆太(日本大)・井上勝夫・伊東 和

40157 人の動作とボール衝撃による床振動応答加速度の対  
応 床振動測定用標準衝撃源としてのボールの有用性に関する  
研究:その2 ○伊東 和(日本大大学院)・井上勝夫・富田隆太

40212 案内標識における景観への馴染みと視認性の両立に  
関する研究 ○大野裕明(日本大大学院)・加藤未佳・関口克明

40236 照明器具の設置高さ大きさが空間に求める明るさ  
に与える影響 ○加藤未佳(日本大)・関口克明

40245 住宅内における磁界強度の計測と実態評価 ○半崎  
亨(NEC ネットズエスアイ)・井上勝夫

40249 スリット状接続構造の電磁シールド性能基準化に関  
する実験的検討 その7 接続部断面性状の違いによる性能値  
の差異について ○吉野涼二(大成建設)・井上勝夫・三枝健二

40354 外壁線の後退した容積率緩和の高層建物が周辺空気  
質に及ぼす影響 ○森田英和(日本大大学院)・早川 眞・上原  
清

40462 鉄道駅における視覚障害者の触覚・聴覚情報利用に  
関するアンケート調査 視覚障害者の移動支援計画における聴  
覚情報利用に関する研究:その1 ○原田佳和(インクスエン  
지니어リングサービス)・浅野裕子・橋本 修・井上勝夫

40463 視覚障害者の鉄道駅利用に対するアンケート調査  
視覚障害者の移動支援計画における聴覚情報利用に関する研究:  
その2 ○浅野裕子(間組)・橋本 修・井上勝夫

41095 中国の都市住宅における暖冷房使用とエネルギー消  
費量の実態調査 ○姜 中天(東北大)・吉野 博・羽山広文・  
于リョウ・渡辺俊行・張 晴原・高 偉俊・吉野泰子・外岡 豊・  
熊谷一清

41256 伝統的養蚕型建築における温熱環境の実態とシミュ  
レーションに関する検討 ○吉野泰子(日本大短大)・王 岩・  
関口克明



41257 伝統的養蚕型建築における空気環境の実態とシミュレーションに関する検討 ○王 岩 (日本大大学院)・吉野泰子・熊谷一清・関口克明

41272 ソーラーチムニーを主体とする環境配慮型大学校舎の自然換気に関する研究 その5 チムニー内熱・換気特性に及ぼす構成材の影響 ○前坂彰子 (三建設備工業)・早川 眞

41332 濃度減衰換気測定法の統計的データ分析法 ○奥山博康 (清水建設)・吉野 博・加藤信介・倉淵 隆・早川 眞・内海康雄

41408 高層建築の自然換気のための壁面風圧均等化の実験 その3 ダブルスキンを持つ矩形建物模型の場合2 ○早川 眞 (日本大)

41632 リターンバイパス方式による置換空調の居住性と省エネルギー評価に関する研究 ○長谷川絢子 (日本大大学院)・早川 眞

## 建築計画 I, II

5175 高度医療を受療する子どもと家族の滞在施設の建築計画に関する研究 ○古谷聡子 (元日本大大学院)・野村 歡・八藤後 猛

5239 小学校建築の主要空間における発生音特性に関する検討 オープンプラン型小学校の音環境に関する研究:その10 ○貝瀬智昭 (東急建設)・井上勝夫・冨田隆太・松本久美

5240 小学校建築の教室空間における空間遮音性能に関する検討 オープンプラン型小学校の音環境に関する研究:その11 ○松本久美 (大成建設)・井上勝夫・冨田隆太

5265 大規模公共体育館におけるアリーナ空間の設営に関する研究 国立代々木競技場第一体育館における設営作業の事例分析より ○矢野裕芳 (日本大)・渡辺富雄・若色峰郎

5417 身体負荷から見た高齢者の便座立ち座り時に使用する手すりのあり方に関する研究(1) 膝痛のない高齢者の膝関節負荷から見た手すりのあり方について ○平山清美 (元日本大大学院)・橋本美芽・勝平純司・持田真之・高塩康洋

5488 認知症グループホームにおける火災安全実態に関する基礎調査 ○村井裕樹 (兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所)・志田弘二・八藤後 猛・野村 歡

5660 障害の種類別や使用補装具別にみた建築物の障壁による困難に関する研究 ○橋本彼路子 (スタジオ3)・野村 歡・八藤後 猛

## 都市計画

7067 市町村合併後における中心市街地指定に関する研究—中心市街地活性化法の改正を受けて— ○櫻井健太郎・櫻井恵介・平田直純・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也・川島和彦

7121 神田神保町の建物用途の変遷に関する研究 (その1) ○本郷寛和・泉山壘威・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也・川島和彦

7122 神田神保町の建物用途の変遷に関する研究 (その2) ○泉山壘威・本郷寛和・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也・川島和彦

7132 秋葉原地区における空間構成に関する研究—建物床用途の現状分析— ○木村麻里子・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也・川島和彦

7234 屋外広告物の構成要素とその判読に関する研究 ○宇於崎勝也・小嶋勝衛・根上彰生・川島和彦

7491 中国・トルファン市における歴史的街区保護に関する研究・その1 —街区保護計画と住民意識— ○ウシュルチナ

ルグリ・後藤将人・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也・川島和彦  
7492 中国・トルファン市における歴史的街区保護に関する研究・その2 —伝統的建造物と街路空間の実態— ○後藤将人・ウシュルチナルグリ・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也・川島和彦

## 建築歴史・意匠

9008 永祿6年の外宮式年遷宮について 中世伊勢神宮の造営組織に関する研究 その7 ○浜島一成 (日本大)

9074 クメール寺院建築の出入口技術の発展過程及びその構法の特徴に関する研究 プレ・アンコール期からアンコール初頭期 (7世紀初頭~10世紀末)のレンガ造遺構を中心として ○チエンラタ (日本大)・片桐正夫・坪井善道・重枝 豊・三輪 悟・大山亜紀子・小嶋陽子・三枝一義・石澤良昭・清水五郎・大川三雄・永松大作

9076 アンコール遺跡の平地式寺院建築における周壁及び回廊の構成について パンテアイ・スレイ、パンテアイ・サムレ、パンテアイ・クデイ、プリア・カーンを比較する ○加藤久美子 (日本大)

9077 12世紀末アンコール遺跡の配置計画に関する研究 EFEO配置図比較による寸法体系の一考察 ○木下洋道 (日本大)

9078 バイヨン北経蔵における石積み工法に関する一考察 ジャヤヴァルマンⅦ世による施工技術の解明 ○長澤隼人 (日本大)・片桐正夫・石澤良昭・坪井善道・重枝 豊・三輪 悟・大山亜紀子・小嶋陽子・チエンラタ・永松大作・三枝一義

9080 王道調査概要とその現状について カンボジアのアンコール王国時代の王道と橋梁と宿駅に関する総合学術調査(6) ○片桐正夫 (日本大)・坪井善道・重枝 豊・三輪 悟・大山亜紀子・小嶋陽子・チエンラタ・三枝一義・石澤良昭・永松大作

9081 王道の施工技術に関する一考察 カンボジアのアンコール王国時代の王道と橋梁と宿駅に関する総合学術調査(7) ○三枝一義 (日本大)・片桐正夫・坪井善道・重枝 豊・三輪 悟・大山亜紀子・小嶋陽子・チエンラタ・永松大作・石澤良昭

9082 アンコール時代の古代橋について カンボジアのアンコール王国時代の王道と橋梁と宿駅に関する総合学術調査(8) ○永松大作 (日本大)・片桐正夫・坪井善道・重枝 豊・三輪 悟・大山亜紀子・小嶋陽子・チエンラタ・三枝一義・石澤良昭

9083 宿駅の配置と平面構成に関する一考察 カンボジアのアンコール王国時代の王道と橋梁と宿駅に関する総合学術調査(9) ○小嶋陽子 (日本大)・片桐正夫・石澤良昭・坪井善道・重枝 豊・三輪 悟・大山亜紀子・チエンラタ・三枝一義・永松大作

9084 東北タイにおける王道、宿駅、施療院の造営・整備に関する一考察 カンボジアのアンコール王国時代の王道と橋梁と宿駅に関する総合学術調査(10) ○大山亜紀子 (日本大)・片桐正夫・重枝 豊・畔柳昭雄・伊東 孝

9138 ダマーシュトック・ジードルンクにおける「キャビンシステム」の展開 ツァイレンパウ形式のジードルンクにおける住戸平面の近代化 その2 ○田所辰之助 (日本大)

9232 山越邦彦田邸「ドーモ・ディナミック」と残存資料の調査概要について 山越邦彦研究・その3 ○矢代眞己 (日本大)・梅宮弘光・大川三雄・野沢正光・堀越哲美・土崎紀子

## 教育

13006 創造性を育む体験的建築教育 空間と構造を結ぶものづくり教育の試み ○藤木瑛子 (日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也

■中田捷夫氏（'65年度修了，中田捷夫研究室主宰）が『ぐんま国際アカデミー』により宇野亨氏（大同工業大学准教授），小嶋一浩氏（東京理科大学教授）他4名と連名で，水野吉樹氏（'85年度修了，竹中工務店設計部）が『竹中工務店東京本店新社屋』により菅順二（竹中工務店）他1名と連名で，栗原卓也氏（'94年度修了，日本設計建築設計群）が『マブチモーター株式会社本社棟』により前田啓介氏（日本アイ・ピー・エム）他3名と連名で，「2007年日本建築学会作品選奨」を受賞した。

■故吉田燦元教授，吉野泰子短大教授，関口克明教授，川西利昌氏が，「World Habitat Award 2006」（主催：Building and Social Housing Foundation）を受賞した。「The New Generation of Yaodong Cave Dwellings in the Loess Plateau」の研究に関する功績によるもので，全世界から書類審査と現地踏査を行い毎年2点が選出される。

■横村隆子短大非常勤講師，短大小石川研究室の「アクティブないえ いえといえの間をデザインする」が，「鎌倉市常盤住宅設計競技 最優良賞」（主催：関東甲信越建築士会ブロック会）を受賞した。良質な都市のストックとしての住宅をテーマに鎌倉市常盤に現存する敷地に2棟の住宅を提案するもので，39点の応募から選ばれた。

■小石川正男短大教授，高田康史短大副手，横村隆子短大非常勤講師，茶屋原梓さん（4年）の「ひとつの街としてのマンション（集住体）づくり」が，「マンションの安全安心アイデアコンペ 佳作」（主催：集合住宅維持管理機構）を受賞した。マンションライフフェア「集住博2007」の記念企画として，マンションの安全安心な暮らしをテーマに60点の応募から選ばれた。

■短大の「工学（技術者）基礎教育の充実と学習支援 学習意欲を啓発する

## 教室ぶろむなード

教育プログラムの実践」が，文部科学省の「平成19年度特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」に採択された。本取組は短大の教育課程を工夫改善する全体の申請であるが，特に短大建設学科の教育内容がヒアリングにて評価された。

■10月6日，1年生と建築学科教員の懇親を目的としたスポーツ大会が，東京ドームボウリングセンターで開催された。約100名の学生たちと教員がともに汗を流した後，駿河台キャンパス1号館カフェテリアへ移動して表彰式を兼ねた懇親会が行われた。



ボウリング大会後の懇親会

■高校生を対象としたイベントである「CST駿河台入試フォーラム」が7月15日に，「CSTオープンキャンパス」が29日に相次いで開催された。入試フォーラムでは白井伸明教授の学科オリエンテーション，佐藤光彦准教授によるミニ講義が行われた（三橋博巳教授によるミニ講義は台風により中止）。オープンキャンパスでは井上勝夫教授と山中新太郎助教によるミニ講義が行われ，数多くの高校生が来場し，立ち見が出るほどの盛況であった。また，学科紹介プログラムの会場には仮設のドームが建設され，音の響きを体験するコーナーが設けられた。そのほか，学生の設計作品の展示，コンクリートを素材としたものづくり，サーモカ

メラを用いた熱環境測定ツアーが行われ，多くの高校生で賑わった。



CSTオープンキャンパス

■8月26日～9月8日に富山県氷見市で開催されたサステイナブルアートプロジェクト「ヒミング・2007」の「歳再生プロジェクト」作品展示に，佐藤慎也研究室が『蔵メール』で参加した。石蔵リノベーションへの提案を一般から募集する参加型プロジェクトを行った。



蔵メール

■10月7日，学生まちづくりグループ「helpus!」の主催による「お茶の水アートキャンパス構想推進会議」が，大学と地域連携のイベント「第4回お茶の水アートピクニック」を開催した。このグループは，JR御茶ノ水駅前商店街「お茶の水茗溪通り会」と都市計画研究室有志を中心に設立されたもの。イベントでは，学生の力をまちづくりに注ぐことを目的に，スケッチ大会，フリーマーケット，まちなみウォークが行われ，その運営に3年生から大学院2年までの有志40名が参加した。



第4回お茶の水アートピクニック

●駿建目次	日本建築家協会 JIA 新人賞を受賞して	2	オリエンテーション報告	15
(2007.11 Vol.35 No.3 通巻145号)	NU 建築フォーラムから		2007年度 日本建築学会大会 (九州)	
表紙「阿佐谷南の家」	NU ARCHITECTURE WEEKへ	4	建築学科教室関係者発表論文リスト	16
設計：小川広次	原寸大の模型をつくる	8	教室ぶろむなード	20
撮影：新建築社	第39回 建築学生海外研修旅行報告	10		

# 日本建築家協会 JIA 新人賞を受賞して

## 小川広次

ミュージックルームよりダイニングルーム、リビングルームを眺める。上部のプロフィリットガラスの中がゲストルーム。



「阿佐谷南の家」が2007年、第18回 JIA 新人賞を戴いた。

これまでどちらかといえば小さな作品を地道に創り続けてきた私が、このように大きな賞を受賞できたことはかけがえのない喜びであり、この場をお借りして関係者の方々に礼を申し上げたいと思う。

独立して事務所を構えてから早16年が過ぎようとしているが、この年齢になってつくづく思うのは、これまでいかに恵まれた環境で建築と接してこられたかということである。

私が日本大学理工学部建築学科に入学したのは1978年である。当時、非常勤講師として設計製図の授業を受けもたれていた高宮真介先生にご教授いただいたことがきっかけで、高宮先生と谷口吉生氏が共同で主宰していた計画・設計工房でアルバイトを始めたのが大学3年生の時だった。資生堂アートハウスのデザインに強く惹かれ憧れていた大学生時代、恐れ多いことに谷口吉生氏のことも、さらには彼の父、谷口吉郎先生のこともよく知らずに飛び込んでしまったのである。そして1982年、卒業と同時に同社に入社（その後、計画・設計工房は谷口吉郎建築設計研究所を引き継ぎ谷口建築設計研究所に組織替えとなる）。

入社してから、高宮先生からは「なるべくヨシ（谷口吉生氏のことを高宮先生はこう呼ぶ）からデザインを学びなさい」とアドバイスを受けてきた。その後、数多くのプロジェクトを谷口氏のもとで担当することとなり、谷口建築設計研究所在籍中には5件の美術館の設計を担当した。

入社したての頃は辛かった。当然ながら知らないことばかりである。二人の建築家が何をしたいのだろうと考え悩み、それに自分を順応させることにばかり気が向いてしまっていた。どうやったら二人が気に入るものがで

きるのだろう。ある時、このスタンス自体が誤りであることに気がついた。それは他人が考えていることすべてを、当人と同等に理解することは不可能なことであるという当たり前のことに思い当たったからである。では、その上でどうするのか。

「そうだ、自分の言葉で語ってみよう。自分の考えで表現してみよう」。

それからだろうか。辛くなくなった。考えて悩むことが楽しくなっていった。

父が急逝したため父の建築設計事務所を引き継ぎ、豊田市美術館の基本設計を完了させると同時に1991年に独立をすることになる。自らの事務所を構えてからも在籍中の美術館設計の経歴をかわれ、谷口吉生氏とともに美術館などのプロジェクトに参加する機会が続いた。法隆寺宝物館、ニューヨーク近代美術館、東京倶楽部などである。

ニューヨーク近代美術館、通称 MoMA はコンペから参加し完全に完成するまでに10年の歳月を費やした。2006年の12月にグランドオープンを迎えた MoMA はこれまでに関わった建築の中で最も難しいプロジェクトだった。1939年にフィリップ・グッドウィン／エドワード・デュレル・ストーンによって、当時ブラウン・ストーンと呼ばれる煉瓦色の街に突如として白い伽藍が現れる。その後もフィリップ・ジョンソンやシーザー・ペリによって拡張が行われてきた。その上で私たちが新しい拡張計画の設計者になったのである。私にとってはまるで建築の歴史の教科書そのものであり、これらの歴史を継承しつつ、MoMAの未来を模索するという設計プロセスは難航を極めた。また、このプロジェクトを担当している間に、現地では9.11の事件があり本当に多くのことを考えさせられるきっかけともなった。このプロ

### 筆者略歴

1960年 東京都生まれ  
1982年 日本大学理工学部建築学科卒業（近江研究室）  
1983～92年 株式会社谷口建築設計研究所  
1991年～ 株式会社小川広次建築設計事務所 代表取締役  
2006年～ 日本大学理工学部建築学科 非常勤講師

（写真左）外観／大通りに面しているため、外部には閉じられた外観となっている。目地型枠による暖かみのあるコンクリート打ち放しと断熱塗料仕上げの白いコンクリートに挿入されたスリットが印象深い。

（写真中左）夜景外観／4.5mのキャンティレバー部分から内部の光が漏れる。（写真中右）エントランスギャラリー／階段踊り場からの見返し。

（写真右）リビングルーム／4.7mの天井高を持つ大空間。チェロを弾くため、音響設計にも配慮している。

プロジェクトを担当できたことは自分の中でも大きな転機となっていると思う。

そんな経緯もありとてもイレギュラーな形態ではあるが、今も二つの事務所で設計活動をしている。現在、谷口建築設計研究所ではスイスの製薬会社の研究所や、アメリカのアジアソサエティの建物の設計を担当している。今でも苦しいことはある。辛いと思うこともある。でも、自分の言葉で語れる時間は楽しいと感じられる。

主宰する小川広次建築設計事務所では、少人数ではあるがスタッフの協力のもと、住宅規模のプロジェクトをじっくりと進めるようにしている。そんな中「阿佐谷南の家」を設計するチャンスを得た。施主は業界では有名なカリスマ編集者で、知り合いになるきっかけは11年程前に私が設計した住宅の取材をしていただいたことに遡る。どんな有名な建築家であっても設計を依頼できる方なのに、なぜ私に？でも嬉しい。期待に応えられるのかとてつもなく不安ではあるが、とてつもなく嬉しい。だから後先も考えずに即刻お引き受けした。とにかく私の事務所にとって必ずエポックメイキングな仕事となる。スタッフ全員にそう伝え、全力で取り組むことになる。

2003年8月、プログラムが書面で届く。A4版一枚にびっしりと書きつづられた文章には適切な表現で要望が事細かに描かれていた。ただ、最後に一行。「小川さんの傑作でないといやです」というくだりだけはどう実現できるのか。ベストを尽くす以外に道は無い……。

建築を創る上でコミュニケーションは欠かせない。建築行為は一人では完結できないのである。そこで重要になるのが「言葉」である。よく、「言葉」は「言霊」とも言われる。思いが込められているからコミュニケーションが成立するのである。だが、思いが込められているからこそ「言葉」の意味は各々で違ってくる。「言葉」が通じない。とんでもない奴に依頼してしまったと悔やまれたこともあったに違いない。紆余曲折を経て基本設計が完成した時に施主から120点満点という高評価を頂戴できた。これは「言葉」の意味を共有できたという証だと思った。とても嬉しかった。また、これが励みにも

なって私たちは次のステップに進んでいけるのである。

当然ながら、工事の段階に入ると今まで以上にさまざまな人々と関わっていくことになる。ただ、これまでと違うのは物という実在の物質との関わりが加わるということ。心に抱いたイメージを図面化して設計図とし、この図面をもとに工事を行い、最終的にはイメージを物質化する。現実化するというプロセスを経る。だから工事関係者とは図面のみではなく、物を介してコミュニケーションを行う。現物のサンプルを並べ、場合によっては原寸大の模型をつくりコミュニケーションを図る。そしてお互いにイメージを共有できた時に建築はこの大地に実現する。初期のイメージを抱いたままに実現するはずである。

2007年5月、「阿佐谷南の家」は第18回JIA新人賞を受賞した。このことを何よりも施主が喜んでくださった。関係者全員が一生懸命に努力をしたご褒美ですとおっしゃってくださった。

受賞後、ご挨拶に伺った。既に竣工して2年の歳月が過ぎていた。表彰状を前にして初めて施主に言えた。

「やっと与えられたプログラムをすべて完了することができました」と。

私のこれまでの人生は、決して順風満帆だったとは言いがたい。また、私の子供たちに対して、世間で言う良い父親だったかと問われたら言葉を濁してしまう。しかし建築家だからこそ、これまでの人生で自分が関わってきたモノを見せてやることもできる。それも建築家ならではのだと考えている。

モノづくりを続ける建築家にとって、これからの時代はより多くの障害や苦難にあたることだろう。しかし、「自分がどうしたいのか」と常に自分に対して問いかけ続ければ必ず答えが見つかるはずである。目で見える「建築」も大事だが、目で見えない「建築」をこそ大事にしていきたい。そういう建築家であり続けたい。

(おがわこうじ・非常勤講師)

※第18回JIA新人賞の審査員講評は以下のURLにアクセスすれば見ることができます。<http://www.jia.or.jp/news/index.html> > JIA新人賞 > 審査員講評



撮影：新建築社



# NU建築フォーラムから NU ARCHITECTURE WEEK へ



講演会風景

## 山中新太郎, 末岡佐江子

本学科では、通常の大学教育では伝えることができない実践としての建築への理解と興味を高めることを目的に、1999年より「NU建築フォーラム」を開催してきた。このフォーラムでは、これまでに第一線で活躍する建築家や構造家、技術者、デザイナーなど、32組のプロフェッショナルを呼び、それぞれの視点から実践的な試みを紹介してもらってきた。これらは学生にとって、実践を通じてプロフェッショナルが思考してきたさまざまな知見に触れることができる貴重な場であるだけでなく、自らの学習経験や研究を社会の中で位置づけていく社会と大学教育の接点にもなってきた。しかし、今まではそれぞれ独立したテーマで年4回に分けられて行われていたために、企画の連動性が弱く、学外への情報発信も有効に図れなかった。本年はこうした問題に目を向け、より発展的にNU建築フォーラムを位置づけていくことを目指して、実験的に3つの講演会を連続で開催する形式を採用した。

「NU ARCHITECTURE WEEK」と銘打たれた今回の一連の講演会では、「越える」という共通テーマを掲げ、建築設計、美術、建築史の3つの分野から既存の枠組みを越えて活躍している菊竹清訓氏、中村政人氏、中谷礼仁氏の3氏を招聘した。さらに、4日目には、建築家の赤松佳珠子氏（建築家・Cat）、石黒由紀氏（建築家・石黒由紀建築設計事務所）、平田晃久氏（建築家・平田晃久建築設計事務所）をゲストクリティックに招き、学部生の前期課題の優秀作品に対する公開講評会「SUPER JURY 2007」が行われた。

## 横河健が切り込み、菊竹清訓を検証／NU建築フォーラム—第1日目

日本現代建築史に数々の足跡を残してきた巨匠・菊竹清訓氏を招いて行われた初日の講演会『建築家・菊竹清訓を検証する』は、モデレーターである横河健教授の発案によって従来の講演会とはまったく異なるスタイルのレクチャーとなった。冒頭の第一部では、モデレーターがスライドを使って菊竹氏の初期作から最近作までを紹介。続く第二部で氏を壇上に招き、京都国際会議場やスカイハウス、メタボリズム運動や世界デザイン会議など、代表作や建築史上の出来事などを振りながら、氏の建築理念や設計当時のエピソードなどをインタビューしていった。

通常なら講演者の独壇場となる建築レクチャーだが、この日は講演者とモデレーターの小気味のよい対話によって終止なごやかな雰囲気で行われた。壇上には夏休みを使って大学院生（M1）有志が作成した京都国際会議場コンペ案の模型二体（全体模型と断面模型）も置かれ、氏が模型を指差しながら会議場空間のあり方やコンペでの苦労譚を話す一幕も。菊竹氏は終止おだやかに、そして、率直に自作や自身の建築論を語ったが、そこには歴史を動かしてきた建築家の重みと迫力があつた。

## マクドナルドもアートに—見慣れたモノを異化していく 中村政人の芸術作品／NU建築フォーラム—第2日目

2日目は、国内外のさまざまな現場でアート作品を積極的に作り続けている注目のアーティスト、中村政人氏



講演する菊竹氏



講演する中村氏 (左)



講演する中谷氏 (左)



NU 建築フォーラム第1日目風景

を招いた。『美術家・中村政人を体感する』と題された講演会のモデレーターは、「湯島もみじ」の設計者であり、富山県氷見市でこの夏に行われたアートイベント「ヒミング」にも参加している佐藤慎也助教。代表作でもある「QSC+mV」, 「CVS」, 「メタユニット」などでは、マクドナルドのサインやコンビニエンスストアの電光看板、街路灯などの見慣れた事物が、本来あるべき場所から切り離されて、まったく別の空間に配置されていた。普段は当たり前だと思っていたモノも、見え方や現れ方が変わることによって、そのものが担っていた記号性やモノと人間の関係の中に潜在する既成概念などが問い直され、見るものの感性を揺さぶってきた。

さらに、中村氏がアートを紹介してまちに働きかけた「ヒミング」や「ゼロダテ」などのアートプロジェクトも紹介された。これらの氏の試みは地域や場所のもっている潜在的な可能性を見つけ出し、それらを顕在化させる媒体としてアートを位置づけていることが特徴だ。まちの人たちが気づいていなかったような地域の魅力を、眼力と創意によってアート作品へと昇華させていく手法は、まちづくりや建築設計の手法とも共通するものがある。

### 越境的史学：歴史工学から化モノ論へ／NU 建築フォーラム—第3日目

3日目は、さまざまなメディアで刺激的な建築論を発表している中谷礼仁氏を招いた。『歴史工学とは何か—化モノ論ノート』と題したレクチャーのモデレーターは氏と同世代の佐藤光彦准教授。通常の建築講演会は歴史家がモデレーターになって建築家の話を聞くというスタイルが多いが、今回は主客が逆転。講演では、大阪の長屋の歴史工学的改修プロジェクト「63」や都市に潜在する過去の形質（先行形態）の発見を契機に古墳時代から現代まで連続と続く重層的な都市形態の形成をひも解く「連鎖都市学」、90年の時を越えて今和次郎の足跡を辿る『日本の民家』再訪（INAX 出版『10+1』連載）などが紹介された。いずれのプロジェクトも、いわゆる文献学からは距離を置き、現場やモノから観察されたことを論理的に組み上げていく実証主義的な姿勢が通底し



模型を使って説明する菊竹氏

ている。後半の「化モノ論」では、住宅の中でモノや人間の欲望を納め込んでいる臍的な空間に着目し、人間が本能的に持つ不気味な部分や人間とモノの親密な関係などが、住宅を作り出す力になっているのではないかと指摘した。

### NU ARCHITECTURE WEEK を終えて

今回は3つの講演会とスーパージュリーを、連続4日間で行う初めての試みとなった。連続イベント NU ARCHITECTURE WEEK 全体のコーディネーションは佐藤光彦准教授が担当した。3回の講演会はいずれも内容が充実しており、合計で500名以上の聴講者が集まった。一方で、会場の規模が大きすぎたり、連続開催のために後半に学生の集まりが少なかったりする課題も見えた。今回は、ポスターやチラシ、模型、当日のパンフレット、会場設営など、運営に関わる多くの作業を大学院生（M1）が担った。連続開催ではどうしても裏方の作業が

#### 第33回 NU 建築フォーラム—1

「越える」建築：『建築家・菊竹清訓を検証する』

モデレーター 横河 健

9月26日（水）17：00～19：30

聴講者 約270名（学外約40名）

○菊竹清訓（きくたけ・きよのり、建築家）

1928年生まれ 主な作品／スカイハウス、出雲大社庁舎、ホテル東光園、都城市民会館、萩市民館、アクアポリス、江戸東京博物館 等

#### 第33回 NU 建築フォーラム—2

「越える」美術：『美術家・中村政人を体感する』

モデレーター 佐藤慎也

9月27日（木）17：00～19：30

聴講者 約120名（学外約15名）

○中村政人（なかむら・まさと、美術家、東京芸術大学准教授）

1963年生まれ 主な作品／CVS、QSC+mV、美術と教育、湯島もみじ、ヒミング、ゼロダテ 等

#### 第33回 NU 建築フォーラム—3

「越える」史学：『歴史工学とは何か—化モノ論ノート』

モデレーター 佐藤光彦

9月28日（金）17：00～19：30

聴講者 約140名（学外約20名）

○中谷礼仁（なかにの・りひと、歴史工学家、早稲田大学准教授）

1963年生まれ 主な著書／国学・明治・建築家、セヴェラルネス—事物連鎖と人間、近世建築論集、磯崎新の革命遊戯 等

講演データ

短期間に集中してしまう。大学院生スタッフの献身的な頑張りがなかったら今回の成功はなかったであろう。今回のイベントで彼らの果たした役割は大きい。

大学の個性と魅力がますます問われる時代に入って、大学主催の講演会は、学生への良質な実践教育の場としても、学外へのアピールの場としても、より重要な役割を担ってきているといえる。本年の試みを活かして、来年以降もより実りのある建築フォーラムのあり方を模索していく必要があるだろう。

(やまなかしんたろう・助教)

## SUPER JURY 2007

「SUPER JURY 2007」が9月29日(土)に、駿河台キャンパス1号館CSTホールにて行われた。これは、主に前期設計課題の優秀作品を全学年一堂に集め、講評会を行うというものである。

学部2年生から大学院生までの設計課題優秀作品を26作品、昨年度の卒業設計・修士設計を5作品、デザインワークショップI・II優秀作品を8作品、合計39作品を25日(火)～29日(土)の期間中、CSTギャラリーにて一同に展示し、最終日に2～4年生の課題20作品について、本人による発表とゲストクリティックと非常勤講師による講評会が行われた。ゲストクリティックとして、赤松佳珠子氏、石黒由紀氏、平田晃久氏の3名と、非常勤講師有志として、小宮功先生、高橋真先生、田中雅美先生、村松基安先生の4名にご参加いただき、モデレーターを佐藤光彦准教授が務めた。

講評会後は、2階のカフェテリアに場所を移し、授賞式を兼ねた懇親会が行われた。各賞にはゲストクリティック3名の名前がつけられ、今年は奨励賞も1作品選出された。以下は、受賞者発表の際に述べられた総評と、受賞者へのコメントである。

### ●赤松佳珠子賞：的場弘之（3年）

今日は、2年生から4年生まで縦断的に見せていただいて、いろいろな作品があって、とても面白かったです。2年生でも結構レベルの高いものもあって、講評会は長い時間ではありましたが、結構あっという間に時間が過ぎたという感じです。今日の発表者は狭き門をくぐって出てきたということもあって、それだけレベルが高かったという印象があります。

私の賞は、21世紀図書館の的場君です。ただわれわれの一致した意見としては、プレゼンテーションはまだでした。

もう少し、やろうとしたことをきちんと人に伝えるという訓練を重点的にこれからやってほしい。という今後の期待をこめて、賞をあげたいと思います。

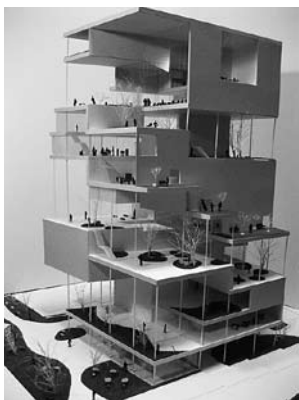
### ●石黒由紀賞：向井正伸（3年）

丹精にできている作品が多く、完成度が高かったと思います。建築をやっていると、楽しいところが1割、大変なところが9割くらいなので、楽しいところを膨らませていくように自分で熱い思いをもって、建築をやってほしいと思います。

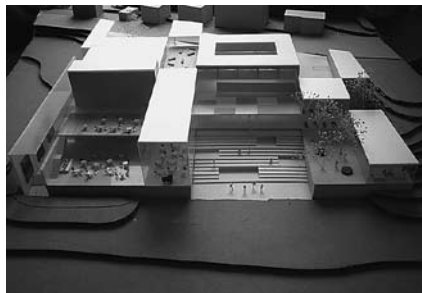
石黒賞は、長者ヶ崎コンプレックスの向井さんです。非常に完成度が高く、そのまま建ちそうな感じで、すごく好印象でした。抑えるところを抑えて、全体のバランスがよいということは、とても大変なことなので、その点を評価したいと思いました。

### ●平田晃久賞：藤原 拓（2年）

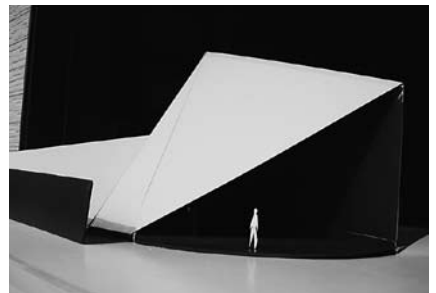
僕が、学生の時のことを思い出していて、それと比べるとレベルの高い作品を見せていただいて、今日はすごく楽しかったです。建築って、そんなに年齢差は関係ないので、学生に対しては基本的にはライバルだと思っているんです。あまり教えている場合ではなくて、うまいことやれると困るなと思っているんです。でも、かといってつまらない建築の世界になるのもいやだなと思っていて、自分勝手な話ですが、頑張り過ぎないくらいにやってもらえると一番いい。でもやっぱりお互い本気



赤松佳珠子賞 的場弘之



石黒由紀賞 向井正伸



平田晃久賞 藤原 拓



講評会風景



ゲストによるクリティック



授賞式風景

モードでやっていきたい。多分、今皆さんの周りにいる人たちが今後すごく貴重な仲間になっていくと思いますので、大事にしてほしいと思います。

僕は、今後の期待も含めて2年生の藤原君に賞をあげたいと思います。新鮮な感じの空間で、素直に魅力的だなと思ったんです。多分最近の建築の傾向だと、ああいう作品はあまり無いですね。逆に2年生だと知らないからかもしれないけど、自分の思ったことをそのまま作っていて、実は建築ってそういう非常に個人的な思い込みみたいなものを、どこまで皆にわかるようにして説得力をもたせていくか、それがきっちりした言葉として発言できたらどんなものでもありなんですよ。何でもありと言うと語弊があるけれど、責任を取るところまでもっていけばありだと思うんです。彼の作品は、何でもありというところまでいっているかはわからないけれども、そうさせてみてほしいという魅力をもっていたと思っていて、賞をあげたいなと思いました。

#### ● 奨励賞：小林加奈（3年）

僕自身は、全体としてすごくいいかどうかはわからないんですけども、ただあの一枚の書架の絵というのがなんか新鮮だったんですね。何か気づかせてくれたというか、こういう書架あってもいいなと思ったんです。それが、しかも初めてのことだったんです。そういうのってすごく重要で、何か一個のことで気づいたということに意味があるんです。だからそういう意味では、非常に感銘を受けました。それを本当は、もっと形にしてい

くと説得力が出てくると思うんですけど、その気づいた一個ということがすごく大事だということを言いたかったので、奨励賞をあげました。（平田氏）

（すえおかさえこ・助手）

2年	パブリックスペース	藤原 拓, 錦木雄太, 今野和仁, 久保山 武
	住宅	関根拓也, 森 一晃, 西島慧子, 高橋雄也
3年	21世紀図書館	的場弘之, 下大圃将人, 甘粕陽介
	まちのライブラリー	大岡亜沙美, 小林加奈
	長者ヶ崎コンプレックス	的場弘之, 公文直子, 向井正伸
	長者ヶ崎セミナーハウス	緒方大亮, 塚本玲央
4年	外部空間の再構築／駿河台キャンパスの外部空間	秋月孝文, 池田 琢, 土屋敬祐
	蔵の再生／中心市街地の再構築	川上敏宏, 北川健太, 谷口絵梨果
	緑地と建築	石ヶ谷望未, 重矢浩志
	根津：アーティスト・イン・ヴィレッジ	岸 祐太, 古澤修一, 松本 隆
M1	プログラム, ダイアグラム, があたえられたとせよ	米山涼子
	駅空間の再生・再編成	西村朋之
	せんだいメディアテーク・アネックス	榎本裕亮
	建築の翻訳	一條真人
卒業設計（2006年度）	祖父江一宏, 小野志門, 榎本祐亮, 横井創馬	
修士設計（2006年度）	山田明里	
デザインワークショップⅠ・Ⅱ	小林輝之・田中克茂・田名部 亮, 久保木亮太・小和田俊也・佐藤久子, 公文直子・田中亜利沙, 大澤綾子・加藤友美・下大圃将人, 楠 友介・佐脇三乃里・鈴木亮介, 川島悠都・木川正也, 池田真人・枝 浩司・小澤歌子, 敷田宗房・佐久間高志・高橋大樹	



奨励賞 小林加奈

出展者リスト

# 原寸大の模型をつくる

## デザインワークショップ I・II 報告

### 佐藤慎也



最優秀賞 小林・田中・田名部案

### 原寸大の模型によるプレゼンテーション

夏季集中授業の「デザインワークショップ I・II」が8月3日（金）～10日（金）の8日間、3年生を中心とした42人の受講者によって行われました。今年度のワークショップは、「都市にとどまる／ながめる／たたずむ」と題した抽象的なテーマを設定し、ユニットマスターに非常勤講師の桑原一郎、手塚義明、村松基安の各氏を迎え、科目担当の佐藤慎也を含めたユニットマスター4人の下で進められました。

今回はすべてのユニットが1つのテーマを共有し、御茶ノ水駅を中心とする半径1キロメートルのエリア内に実在する敷地を各自が選び、「とどまる／ながめる／たたずむ」ための場所に対する提案を行いました。内容については建築物や家具、装置など自由に提案することができましたが、原寸大の模型によってプレゼンテーションを行うことと、それを実際の場所に合成したイメージを作成することが義務付けられました。機能についても、休憩所や待ち合わせ場所といった名前の付いたものに限定せずに目標となる行為だけを設定することで、提案内容に拡がりを与えられることを期待しました。

3年生にとっては初めてのグループ設計課題であることから、アイデアを1つにまとめるために議論を続ける根気強さが要求されました。一方で、原寸大の模型をたった1週間で製作しなければならないことから、体力も必要となりました。それにも関わらず、最終日の講評会ではバラエティに溢れた多くの力作が並びました。

### 原寸大の模型≠実物

義務付けられた模型は原寸大でなければなりませんでしたが、実物をつくる必要はありません。つまり、鉄やコンクリートといった素材を想定した計画であっても、紙や木などで実際の形状をつくるだけでよかったため、提案に用いる素材を選択する可能性が拡がりました。その条件に対し、実際に使用する素材を用いた原寸大模型（つまり実物）を製作するグループもあれば、実際の素材では構造的に成立するものの、模型では強度が足らずに支持することができなくて苦勞したグループもありま

した。こうして原寸大というスケールが、実物を模型として表現することの意味を問い直すことになりました。

佐々木隼・末吉将悟（桑原ユニット）は喫煙者のための木製ベンチを提案し、向き合った2人が実際に座ることができるように木材を組み合わせた実物をつくり出しました。一方、寺元大悟・富田洋平（村松ユニット）は、7号館のあまり知られていないバルコニーの一角に注目し、そこに設置するイスを計画しました。平行な2枚の板にひも状の素材を渡すことで座面を形づくる提案でしたが、強度が不足していたために計画した形状を維持することができませんでした。

そのほか、数田宗房・佐久間高志・高橋大樹（佐藤ユニット）は、秋葉原に大量に設置されているカプセルトイのカプセルがすべてゴミになってしまうことに着目しました。そこで、カプセルを素材としたソファをゴミ回収システムとともに提案し、実際に集めた大量のカプセルを用いて実物をつくっています。今関俊・岩木友佑・太田佳織（佐藤ユニット）は、聖橋のたもとにある小さな公園のようなスペースに、周囲の風景を切り取るための開口部を設けた壁を配置しました。コンクリート製の壁を段ボールに置き換えながらも、実際の大きさを持ったスペースを再現する力作でした。

### 現実に当て嵌められた模型

講評会には、ゲストとして重枝豊准教授、山崎誠子助教が参加し、最優秀賞、ユニットマスター賞、ゲスト賞が選ばれました。

重枝賞に選ばれた川島悠都・木川正也（村松ユニット）は、御茶ノ水駅と水道橋駅の間、神田川沿いの歩道に置くベンチを提案しました。折り曲げられた1枚の板が人型にくり抜かれ、そのまま上を見上げる姿勢で座ることで、頭上に覆い被さる樹木を見上げて楽しむものです。緑豊かな敷地に着目し、樹木に包まれた感覚を得るベンチをつくり出すことに成功しました。山崎賞に選ばれた池田真人・枝浩司・小澤歌子（手塚ユニット）は、秋葉原駅前の広場に林立する樹状オブジェを計画し、回転させて倒すことで葉の部分が座面となる可動式ベンチを提

案しています。紙製の模型は実際に座れないものでしたが、デザインのポイントとなる可動性が再現され、実物を持つてあろう雰囲気を与えていました。

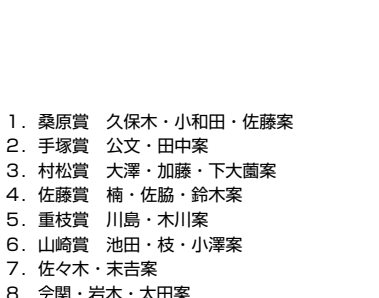
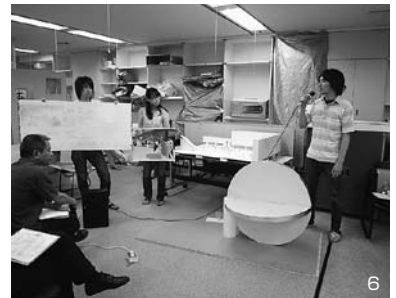
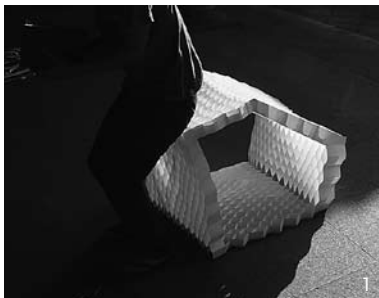
桑原賞には、久保木亮太・小和田俊也・佐藤久子（桑原ユニット）の紙を折り曲げてつくられた家具が選ばれました。具体的な場所を想定した提案ではないものの、持ち運びが可能となる軽量の構造体を持つ家具が評価されました。手塚賞に選ばれた公文直子・田中亜利沙（佐藤ユニット）は、御茶ノ水が大学、古書店、スポーツ用品店、楽器店といった複数の要素が重ね合わされた街であることから、それらの情報を顕在化させる人型サインを提案しました。さまざまな色を持ったサインは、街を彩るオブジェとなるとともにベンチにもなり、そのデザインの完成度が評価されました。村松賞に選ばれた大澤綾子・加藤友美・下大蘭将人（手塚ユニット）は、包装資材として使われるエアパッキン（プチプチ）を公園の遊具と組み合わせることで、仮想的でありながらも魅力あふれる場所を提案しました。佐藤賞には、楠友介・佐脇三乃里・鈴木亮介（桑原ユニット）のガードレールへ

の提案が選ばれました。ガードレールを枝と葉による美しいパターンへと変化させることで、都市の風景を変化させる可能性を持ち得ています。

最優秀賞に選ばれた小林輝之・田中克茂・田名部亮（桑原ユニット）は、工事現場の仮囲いに対する提案を行いました。街で見慣れた仮囲いのほとんどがフラットなものであるのに対し、二次元方向にカーブさせる単純な操作によりイスや台としての利用を提案しています。街にありふれたものに着目し、最低限の形態操作によって機能を生み出す提案は、リアリティの非常に高い作品として評価されました。更に幸運なことに、5号館が改修工事を行っていることから、今村雅樹教授と施工を担当する清水建設の協力により、原寸大の模型を実際の現場に当て嵌めることができました。現実の風景に置かれた原寸大模型の様子を撮影した写真は、今回のワークショップの意図を明確に表したプレゼンテーションであり、その意味でも最優秀賞にふさわしい作品となりました。

（デザインワークショップⅠ・Ⅱ科目担当・

さとうしんや・助教）



1. 桑原賞 久保木・小和田・佐藤案
2. 手塚賞 公文・田中案
3. 村松賞 大澤・加藤・下大蘭案
4. 佐藤賞 楠・佐脇・鈴木案
5. 重枝賞 川島・木川案
6. 山崎賞 池田・枝・小澤案
7. 佐々木・末吉案
8. 今関・岩木・太田案



# 第39回 建築学生海外研修旅行報告

今回の海外研修旅行は、25日間コース（Aコース）と15日間コース（Bコース）を設け実施し、学部3年生から大学院生まで合計81名が参加しました。いずれのコースも盛りだくさんの内容で、すべてを報告しきれませんが、コースの概要や参加学生のレポートを中心に報告します。

研修旅行で感じたこと、学んだことはそれぞれだと思

いますが、実際にその地を訪れ、その建築や都市を体感することの重要性を痛感したことは参加した皆さんに共通だと思います。ぜひ、現地でも感じたことを今後にかけてほしいと思います。

学部1年生や2年生は、ぜひ来年度以降に参加してください。

（川島和彦・専任講師）

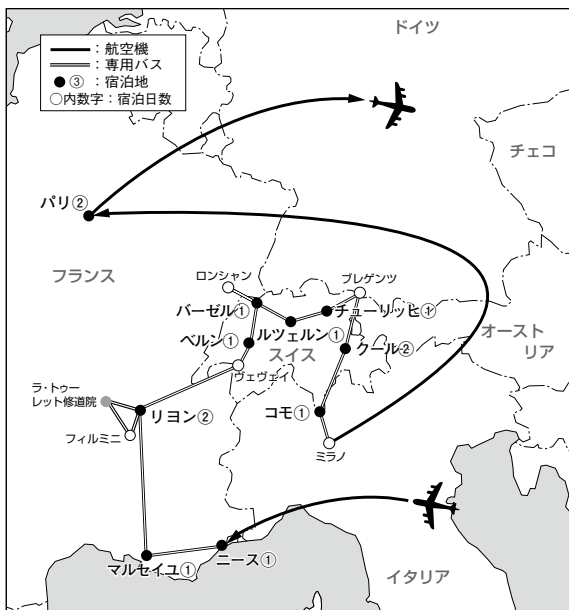
## Aコース まぼろしの建築へ 古代ローマから現代建築の現場まで



ロンシャンの教会にて（Aコース）

〈同行教員〉 佐藤光彦准教授、川島和彦専任講師  
 〈参加学生〉 大澤綾子、太田佳織、大野佑太、岡 宏憲、加藤友美、神崎聡美、北野陽子、小林加奈、佐久間智己、佐藤哉子、柴道翔太郎、清水俊介、清水涼子、神保享平、末吉将悟、鈴木佳美、住吉良子、高崎真理子、高瀬治郎、高橋大樹、田中亜利沙、田中太一、地脇未帆、寺元大悟、富田洋平、中野直樹、中村尚志、中村文彦、福井直輝、藤井さゆり、藤田 伶、松田佳那、森實幸子、安田真弓、山崎 香、綿井菜摘、渡邊直子、鳴嶋 隆、山田泰宏、平田直純、櫻井恵介 以上41名

## Bコース ヨーロッパの都市・建築・文化へ 近代の発祥から現代への建築行脚



建築家 Valerio Olgiati 氏とともに（Bコース）

〈同行教員〉 横河 健教授  
 〈参加学生〉 秋元康宏、秋山智絵美、荒井亮蔵、飯田愛美、市原恵太、岩井悠貴、枝 浩司、大越はるか、岡村彰子、荻野裕行、柿崎大輔、菅 美穂、楠友介、久保木亮太、小林輝之、小宮康輔、近藤里美、齋藤卓馬、酒井恵美、榊原 彩、佐藤久子、鈴木亮介、塚本香奈、林 雅和、原 友里恵、藤村知子、堀内一冬、堀内達朗、松本江美子、真砂 遥、八隅裕介、吉岡真一、吉宮沙織、石井 陽、大島可菜、桐澤 航、櫻田和也、米山涼子、倉沢健一、原田創一 以上40名



## 街全体が一つの建築

大野佑太（3年）

研修旅行を通して多くの建築だけでなく、各都市において街の文化や歴史を体験することができた。旅の序盤からイタリアの街並みの美しさには圧倒された。街の至る所まできちんと舗装がされ、内部空間と外部空間の違いをあまり感じない。日本ではあまり見ることのできない街の統一感や、広場や教会に自然と人が集まる様子はヨーロッパとの文化の違いを特に気づかされ、一つの建物だけでは作ることのできない各都市の独特の街並みは、昔からの歴史と市民の街への思いを感じた。特にサンジミニャーノ、カルカソヌの二つの囲郭都市は街全体が一つの建築にも見える。通常の広がっていく都市とは違い、内部へ完結していく。住民にとって各住居の壁が区切りなのでなく、城壁が領域を決定している。広場や狭い街路において、住民同士のスキンシップがそこには常に見ることができ、とても新鮮な体験であった。この伝統的な街とバルセロナやパリの大都市を比較すると、今までの歴史を背景にして現代社会への移行が見られる。ランドスケープとの関係だけでなく、その中の現代建築のプログラムや機能・デザインの役割の重要性にも気づかされた旅であった。



サンジミニャーノの街並み

## ヨーロッパの旅を終えて

柴道翔太郎（3年）

イタリアに始まり、スイス、フランス、スペインと4カ国を巡り、25日間にわたった今回の海外研修旅行は自分にとって非常に貴重な経験となりました。ヨーロッパの文化や習慣をこの身で感じたこと、本や映像を通してしか見たことのない有名建築家たちの作品や数百年の歴史を刻む古代の建築に直接触れた感動は忘れることはないと思います。

個々の建築だけでなく、それぞれの都市の街並みも強く印象に残るものでした。ローマで、「狭い路地を挟んで背の高い建築物が隙間なく並んでいる」という光景を初めて目にした時は、まるで絵画や映画の世界である

かのように感じたのを覚えています。もともとそのような光景から絵画などが生み出されているのであって、私の感想は本来あるべき姿とは逆になっている気がします。そんな感想をもってしまふほどヨーロッパの街並みは、自分もっていた「当たり前の街並み」とは異質で美しいものでした。

写真はベネチアの路地です。細く迷路のように張り巡らされた路地とそれをつなぐ広場、さらにその街中を巡る運河、水路がつくり出す街並みは数々の都市の中でもひととき印象に残っています。



ベネチアの路地

## きっかけ

藤田 怜（3年）

研修旅行で得た一番の収穫は、「挑戦したい」という熱をもらったことだ。それは建築に対する想いだけではない。研修の25日間は、それまで抱えていた迷い（自分がやりたかったことは何だったのか、これから何を目指していくのか）をこれからのエネルギーに変換する貴重な時間であった。

大聖堂のクーポラにのぼり、ル・トロネで瞑想し、サヴォア邸には多くの発見があった。夜はワインとおいしい食事。数多くの建築や空気感、食事や仲間たちとの会話が、迷いをちっぽけなものに変えていく。やるしかないじゃないか。当たり前だけど割り切れないこと、そんなことをアタマの片隅で考えるきっかけになった。

特に思い出深いのは、ハーレン・ジードルングである。集まり寄り添って暮らす豊かさ、またそれを感じながら個々の生活を楽しむゆりのようなものが、肌から伝わってきた。保存管理された有名建築も良いが、使う人々が建築を生き活きさせることを改めて痛感した。

今回の経験が、思っている以上に肌身に刷り込まれ、自分のこれからの活動に影響を与えていくのではないかと感じる。

背後にたたずむ  
ハーレン・ジードルング

## バルセロナでの1日

高瀬治郎（3年）

海外研修での25日間は、毎日新しい発見があって、刺激的な日々だった。中でもバルセロナでの1日は最も印象的だった。

ガウディのサグラダ・ファミリアでは、その大きさと自然をモチーフにした装飾、それから構造は興味深いものだった。細部まで施された装飾は一つのファサードとして見たとき、何かが溶け出したように見えて不思議で異様だった。

同じ日にミースのバルセロナパビリオンを訪れた。近代建築の基本的な建築言語が水平と垂直に構成されているだけで、均質な空間だろうと思っていた。でも実際は今まで体験したことのないような感動的な空間だった。歩くと、見えてくるものや感じる空気が変わっていった。内部と外部の境界がなく、空間が折り重なっている様は魅力的だったし、ガラス越しに見える広々とした周辺の風景や、屋根と壁の間から見える空や緑はとても美しかった。日本建築に少し似た奥行き感があると思った。

25日間でさまざまな時代の建築を見た。時代が変われば当然建築も変わる。大部分の都市は、その中にいくつかの時代の建築が同時に存在し形成されている。それを感じることができた。



バルセロナパビリオンにて

## 海外研修の3つの印象

鳴嶋 隆（4年）

本当にあつという間の25日間、そして密度の濃い時間だった。私自身が海外研修に参加して良かったと思えることが3つある。

まずは、たくさんの建築を見ることができたこと。中でも、サンピエトロ大聖堂は最も印象が強い場所だ。スケールの大きさに大きく驚きながらも、聖堂という独特な雰囲気心が落ち着かせてくれた。また、個人では簡単には行けない所も、建築学科の研修旅行だから行けたと思う。例えば、ロンシャン教会などは、駅から離れた山の上であり個人ではなかなか行けない場所だ。また、伊東事務所の方が直々に話をしてくれたモンジュイック2などは貴重な体験だった。

二つ目は、イタリア、フランス、ドイツ、スイス、スペインと5カ国の文化に触れ合えたことだ。シエスタや

13時に閉まってしまうオフィスなど、日本とは大きく違う文化に驚かされた。

最後は、41人の仲間と2人の先生と一緒にヨーロッパに行けたこと。41人+2人がいたから、一緒に楽しみ、学び、感動することができ、より充実した時が送れたと思う。

学生生活最後の夏に25日間の密度の濃い時間を送れたことで、大学生活中の中でもっとも充実した夏休みが送れた。本当に良かった。



モンジュイック2

## 一生に一度の欲張った旅

高崎真理子（3年）

私は以前イタリアのローマ、フィレンツェ、ベネチア、ミラノを訪れたことがあります。その時は初めての海外旅行であったため、目に映るすべてのものにただ感動していましたが、今回は建築を学ぶというテーマでさまざまな都市の街並みを見て回りました。特にイタリアは昔、都市国家であったため、初めて訪れたシエナ、ヴェローナ、ナポリなどでも各地の特色を見ることができ、都市による特徴の違いを存分に楽しめました。また今回の旅行では、コルビュジエが設計した多くの作品に触れてきました。今まで私は近・現代の建築の良さをあまり理解できていませんでしたが、ガイドさんのお話や先生方の解説を聞き、さらにコルビュジエの代表作であるユニテに宿泊してコルビュジエが造り上げた空間を体感する機会が与えられたことによって、親近感をもつことができました。もう一つ、私が行ってみたいと思っていたのはフランスのパリでした。あまり旅行に関心のない母からも「パリはすごくいい街並みだよ」と勧められていたからです。パリは古い建物を残しながらも、それらとうまく調和させるようにきれいに整備された道路が放射線状に広がっていて、その光景を凱旋門の頂上で見た時の感動は一生忘れられないものとなりました。



凱旋門から見たパリの街並み

最後に、この旅行でゴシック・ロマネスク・ルネサンス様式などのさまざまな教会を見てきました。私は中高6年間キリスト教主義の学校に通っていたため、久しぶりにキリスト教を身近に感じ、かつての礼拝を思い出しました。そしてこれらの素晴らしい教会の中で建築に対する自分の考え方など、自分自身を見つめることができました。25日間という長い期間の中で貴重な経験ができて良かったと思います。

## Bコース

### 充実した日々

岩井悠貴（3年）

すごい！ ル・トロネ修道院を見たとき私が感じたものである。人間が本当に素晴らしいものを見たときや体験したとき、この言葉しか出なくなる気持ちがわかった。そこに立つだけで目に見えないものを体で感じ、不思議な感覚に包まれた気がした。それぞれの地域に行き感じたことは、そこに住んでいる人々が自分の街を誇りに思い、大切にし、街を理解し、文化を大切にし、建築家を理解し、誇りに感じているのではないかと思う。このような気持ちが美しい街並みを作りだし、建築を作っているのだと思う。そしてこのような環境が、多くの巨匠を生み出し、立派な建築を作るのではないか。建築家も文化を大切に、後世に伝えようとしたり、新しい文化を築こうとしているのをしみじみと感じた。建築家と人々と文化、この3つがお互いに理解し合っているからこそ、素晴らしい建築が生まれるものと感じた。

ニースから始まり、パリで終わるといった普通では体験できないようなことをたった2週間で回り、多くの建築物を見て、文化に触れ合ってきた、この2週間はとても充実したものになり、私に多くの刺激を与えてくれた。



ル・トロネ修道院

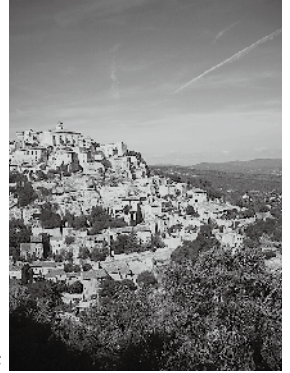
### 研修旅行を終えて

吉宮沙織（3年）

ヨーロッパに行ってきました。約半月となる旅路は長いようでもあり短いようでもあり、いろんなことを考えたような、はたまた初めて見る

もの聞くもの体験するものにただただ圧倒されていたけだったような。今考えてみてもどうにも答えは出ず、この体験の貴重さが本当の意味で理解できるのはもう少し先のような気がします。

私が一番印象に残っているのは、各地の街並みです。色合いや高さといった面から見ても家や公共建築一つ一つが調和しているところが多かったです。また、古く厳しい風合いのドアにテンキーロックが付いていたり、外観からは想像がつかないほど室内が最新の設備だったり、「古いものも大切にしていこう」という姿勢を感じることができました。これは、総じて人々の自分たちの住む街への意識が高いことの表れではないかと思えます。当たり前だけど大切なこと。スクラップアンドビルドとよく言われるのが日本の建築体制ですが、このような姿勢は私たちも見習わなければいけないと感じました。



山岳都市ゴルド

### ヴァレリオ・オルジアッティ

塚本香奈（3年）

初めてのヨーロッパ。見るもの、触れるものすべてが新鮮で衝撃的だった。ヨーロッパの旧市街は歴史を感じたし、その空は日本にいる時よりも高く、青く見えた。2週間の間にこんなに多くの建築を見たのは初めてだったし、とても充実した、あつという間の2週間だった。建築を見るだけではなく、その建築の周りの環境・人々の生活を見ながら学べたことは、雑誌の写真や図面だけでは学べないことで、自分にとってとても貴重な経験になったと思う。一番印象に残っていることは、スイスの建築家であるヴァレリオ・オルジアッティに会えたこと、まだ完成したばかりの音楽家のためのアトリエを見せてもらったことだ。光の入り方や中庭はとても素敵だったし、オルジアッティの考え方はとても勉強になった。



音楽家のためのアトリエ



## 日常の風景

藤村知子（3年）

この風景、本の写真で見た……！本で見ていた建物や風景の中に自分がある！実際に空気を感じ、手で触れる。本の中ではすべてが同じカラーで並べられ、同じ文字体で語られる。だが建築一つ一つにそれぞれの物語・時間があり、空気がある……本では読みとれないものばかり経験することができた。本ではわからない日常を見ることができたのが一番の収穫。

ユニテ・ダビタシオンでは屋上のプールで思い思いの時間を過ごす人々、コルビュジェのデザインしたイスで遊ぶ現地の子どもたち……。こんな環境の中で生活できたらうやましいなと思ったが、それがどんなに有名なものでもそこで生活している人々や子どもたちにとってはただの生活の一部。建築の勉強をしている私たちにとっては、すごいものであったり、カメラを向けるものであったり、そこで生活している人々にとっては日常にあるものにすぎないのだ。人々に必要とされ、生活の一部となり、建物が日常に溶けこんでいる。すごく大切なことだと思う。そういった建築が街に、世界に、歴史に残っていくんだらう。この2週間、まとめきれないけど……

感動！

ユニテ・ダビタシオンの日常



## 本の世界へ

菅 美穂（3年）

初めての海外。すべてが新鮮で、今まで本や映像でしか見たことがない建築を実際に見て、触って、空間を感じる事ができて、自分にとってとても良い経験になったと思う。写真や言葉、図面ではわからなかった空間を体感できて感動した。ただ、「すごい」としか表現する言葉が見つからないほど綺麗な建築に、皆が上を見上げながら口を開けている風景には少し笑えた。コルビュジェの光の取り方、ピーター・ズントーの素材感へのこだわりなど、学ぶものがたくさんあった。学ぶことが多すぎて旅の最後は頭がパンクしそうだった。多くの写真を撮って帰ったものの、そこには写っていない本物の空間や空気を体感したからこそ自分の本当の知識となったのだと思う。

そして改めて思い知らされたのが、ヨーロッパでは、建築に詳しくない人でもそれなりの教養があるというこ

とだ。自分が暮らしている家、街について少なからず基本的な建築知識をもっている人が多い。建築物の貴重さを知った上で、そこに住み大切に使っているのである。日本はどうだろうか？私は、どうだろうか？ヨーロッパ人の、建築に刻まれた歴史を大切にすることは、あまり日本人にはないと思う。建築だけではなく歴史や文化について、まだまだ勉強不足だと感じた旅行だった。

ロンシャンの教会



## スイスを満喫

飯田愛美（3年）

初めてのヨーロッパ、中でも一番印象に残っているのがスイスでの自由研修である。4人でベネディクト教会に向けてホテルを出た私たちは電車で揺られること1時間。そこからバスに乗り継ぐはずが、バス停が見つからず、登山家の女性2人組に尋ねたところ同じバスに乗るといふ。一緒に話をしながらバスを待った。スイスでは3カ国以上話せないと就職できないということで、彼女たちの英語も聞き取りやすかった。そして、やってきたのはバスというよりワゴン車？2人に話しかけていなかったら絶対わからなかった。バスを降りた所から山道を徒歩で約1時間。やっと見えてきたのは小さな村。そこに素朴にたたずむのがベネディクト教会である。小さな木をうろこ状に張った外観はとても村に馴染んでいた。道ではテニスを楽しむ老夫婦。長時間苦労してでも行って良かったと思える、そんな教会だった。帰りはバスもなく徒歩で駅を探すこと1時間半。途中、道に迷い草原を歩くこともあったけれど、スイスを満喫できる1日であった。行った国、立ち寄った都市それぞれの文化、習慣に触れ、建築をその土地の人々の目線になって実感できる、そんな15日間だった。

聖ベネディクト教会



# オリエンテーション報告

中田善久



BDS 柏の杜 (A コース)

建築学科2年生を対象としたオリエンテーションが、7月7日(土)に実施されました。この企画の目的は、関東近郊の建築施設の見学を通して、専門的な視点から建築を勉強してもらうとともに、教員と学生の親睦を深めるために毎年行われている行事です。企画された9コースは、各先生の専門性が活かされたものとなっており、今後の学習に大いに参考になったと確信しています。A～Fコースまでは貸切バスで、G、Hコースは公共交通機関を利用して見学場所を移動しました。

見学先は、最近話題の建築から歴史的建造物、工場、美術館、再開発現場とバラエティに富んでおりますが、これらは、すべて各コースの先生方のオリジナル企画です。

当日は、見学先で行われるOBの方々や施設の方々、また教員による専門的な説明に、熱心に聞き入る姿、教員とふれあい楽しむ姿も印象的でした。実際に建築空間を体験することで、より一層建築に興味がわいてきたのではないのでしょうか。

今年の特徴としては、例年に比べて、現場見学を行うコースが多く見られたことが特徴的です。今回のオリエンテーションにより、普段の授業とは違うことが得られ、よい経験になり、それぞれのコースで成果が十分に得られたと思います。

今回のオリエンテーションを通して、皆さんが「建築」に対して思ったこと、考えたこと、今後の勉強に役立ててもらいたいと思います。

(2年クラス担任・なかたよしひさ・准教授)

<p>A コース『デザインとテクノロジーをめぐる七タツアー' 07』 BDS 柏の杜, さいたまスーパーアリーナ, 成蹊大学情報図書館, 六本木ヒルズ 斎藤公男, 岡田 章, 宮里直也非常勤講師</p>
<p>B コース『都心部の開発事例をめぐる』 晴海トリトンスクエア, 豊洲埠頭付近, アーバンドックららぽーと豊洲, 霞ヶ関R7プロジェクト 根上彰生, 三橋博巳, 宇崎崎勝也, 川島和彦, 柳田 武</p>
<p>C コース『建築の音環境計画を考えよう』 聖学院大学礼拝堂・講堂, 光和小学校, 所沢市民体育館 井上勝夫, 半貫敏夫, 橋本 修, 富田隆太, 小久保 彰, 吉見佳代子</p>
<p>D コース『谷口吉郎とエコファクチュリングをめぐる秩父ツアー』 長瀬石置, 秩父太平洋セメント(株) 秩父工場, 浦山ダム 宇杉和夫, 中田善久, 飛坂基夫非常勤講師</p>
<p>E-1 コース『神奈川美術館ツアー』 横須賀美術館, 神奈川県立近代美術館 葉山館, 神奈川県立近代美術館 鎌倉館 今村雅樹, 本杉省三, 横河 健, 佐藤光彦, 山中新太郎</p>
<p>E-2 コース『神奈川美術館ツアー』 神奈川県立近代美術館 鎌倉館, 神奈川県立近代美術館 葉山館, 横須賀美術館 関口克明, 渡辺富雄, 佐藤慎也, 八藤後 猛</p>
<p>F コース『関東シルクロードを見る —富岡製糸所と歓喜院の修理工事現場—』 富岡製糸所, 歓喜院 片桐正夫, 大川三雄, 重枝 豊</p>
<p>G コース『横浜で現場を見よう—環境・設備を中心に—』 4階建て事務所ビル工事現場, 横須賀美術館 早川 眞</p>
<p>H コース『都市防火と江戸文化を学ぶ下町ツアー』 東京都消防庁本所防災館, 江戸東京博物館 安達俊夫, 白井伸明, 山田雅一, 田嶋和樹</p>



BDS 柏の杜 (A コース)



浦山ダム (D コース)



横須賀美術館 (E-1 コース)

# 2007年度 日本建築学会大会(九州)

## 建築学科教室関係者発表論文リスト

○印 発表者

### 材料施工

1008 各種要因が高強度コンクリートを用いた模擬柱部材のコア強度に及ぼす影響 その1 実験概要および温度性状の検討 ○平野 学 (ものづくり大)・中田善久・大木崇輔・大塚秀三・毛見虎雄

1009 各種要因が高強度コンクリートを用いた模擬柱部材のコア強度に及ぼす影響 その3 コア強度に関する検討 ○中田善久 (日本大)・大木崇輔・大塚秀三・平野 学・毛見虎雄

1024 高強度コンクリートのポンプ圧送前後の品質変化に関する研究 その1 文献調査の概要 ○染谷直己 (ものづくり大)・澤本武博・中田善久・大塚秀三・岡本圭市・毛見虎雄

1025 高強度コンクリートのポンプ圧送前後の品質変化に関する研究 その3 配管を用いた長距離圧送による実験的検討 ○大塚秀三 (ものづくり大)・中田善久・岡本圭市・染谷直己・澤本武博・毛見虎雄

1030 単位水量の違いが高強度コンクリートの諸性質に及ぼす影響 その1 実験概要およびスランプ・スランプフロー ○斉藤丈士 (内山アドバンス)・中田善久・女屋英明・春山信人・大塚秀三・藤井和俊

1031 単位水量の違いが高強度コンクリートの諸性質に及ぼす影響 その2 フレッシュコンクリートの性状に関する検討 ○女屋英明 (内山アドバンス)・中田善久・斉藤丈士・大塚秀三・春山信人・藤井和俊

1032 単位水量の違いが高強度コンクリートの諸性質に及ぼす影響 その3 硬化コンクリートの性状に関する検討 ○春山信人 (フジミ工研)・中田善久・斉藤丈士・女屋英明・大塚秀三・藤井和俊

1039 温水養生による各種セメントを用いた高強度コンクリートの圧縮強度の早期判定に関する研究 粗骨材の岩種の違いが試験結果に及ぼす影響 ○森田鉄也 (ものづくり大)・飛坂基夫・中田善久・大塚秀三

1100 フレッシュコンクリート中の水の塩化物イオン濃度試験における試料採取方法に関する検討 その3 希釈倍率, 試料液の抽出方法と塩化物イオン濃度試験方法の違いが試験結果に及ぼす影響 ○長井義徳 (太平洋マテリアル)・棚野博之・中田善久・鈴木澄江・瀬古繁喜・斉藤丈士

1106 衝撃弾性波によるコンクリートの非破壊圧縮強度推定法に関する研究 表面の乾燥が構造体コンクリートの弾性波速度に及ぼす影響 ○立見栄司 (三井住友建設)・中田善久・清水五郎・大塚秀三

1219 昭和基地で観測隊によって打設されたアルミナセメントコンクリートの経年変化と強度推定について ○内藤正昭 (日本大短大)

1274 戻りコンクリートを再利用したポンプ圧送用モルタルの実用化に関する研究 その9 再生モルタルの製造及び貯蔵方法の検討 ○小田英樹 (山宗化学)・和田美佐雄・和田平作・

小宮政光・高橋俊夫・女屋英明・中田善久・毛見虎雄・緑川雅之・大塚秀三

1275 戻りコンクリートを再利用したポンプ圧送用モルタルの実用化に関する研究 その10 再生モルタルの凝結遅延性に及ぼす要因の検討 ○高野 肇 (山宗化学)・和田美佐雄・和田平作・小宮政光・高橋俊夫・湯本哲也・女屋英明・中田善久・毛見虎雄・大塚秀三

1276 戻りコンクリートを再利用したポンプ圧送用モルタルの実用化に関する研究 その11 実機製造により18時間経過した再生モルタルの性状 ○湯本哲也 (和田砂利商会)・和田美佐雄・和田平作・小宮政光・高橋俊夫・福島圭一・女屋英明・中田善久・毛見虎雄・大塚秀三

1277 戻りコンクリートを再利用したポンプ圧送用モルタルの実用化に関する研究 その12 再生モルタルの構造体コンクリートに及ぼす影響 ○福島圭一 (和田砂利商会)・和田美佐雄・和田平作・小宮政光・高橋俊夫・湯本哲也・女屋英明・中田善久・毛見虎雄・大塚秀三

1303 養生条件の違いが硬化コンクリートの単位セメント量試験に及ぼす影響 5年間養生した水和セメントによる強熱減量および溶解量の検討 ○須藤絵美 (内山アドバンス)・中田善久・笠井芳夫

1331 溶融スラグ細骨材の左官用モルタルへの適用に関する基礎的研究 その4 溶融スラグ細骨材の品質およびこれを用いたモルタルの調合 ○赤石裕一 (日本大)・松井 勇・中田善久・高橋宏樹・落部鮎美・田辺英男・伊藤 学・鈴木大介・菅田雅裕

1332 溶融スラグ細骨材の左官用モルタルへの適用に関する基礎的研究 その5 溶融スラグ細骨材を用いたモルタルのフレッシュ性状および強度性状 ○鈴木大介 (山宗化学)・松井 勇・中田善久・高橋宏樹・落部鮎美・田辺英男・伊藤 学・赤石裕一・菅田雅裕

1333 溶融スラグ細骨材の左官用モルタルへの適用に関する基礎的研究 その6 溶融スラグ細骨材を用いたモルタルの作業性の検討 ○伊藤 学 (日本化成)・田辺英男・赤石裕一・鈴木大介・落部鮎美・高橋宏樹・中田善久・松井 勇・菅田雅裕

1588 型わくの転用に伴う合板およびコンクリート表面の品質変化 ○久保田英樹 (ものづくり大)・中田善久・大塚秀三・毛見虎雄

### 構造 I, II, III, IV

20018 床下空間の空隙率に着目した高床式建物模型周囲の吹きだまりに関する風洞実験的研究 ○桑野克彰 (日本大)・佐藤寿樹・高橋弘樹・半貫敏夫

20233 土被り圧の減少に伴う粘性土の水平土圧変化に関する研究 ○木原朋広 (ハウズプラス住宅保証)・ 實松俊明・下村修一・安達俊夫・山田雅一

- 20243 改良地盤上に支持された基礎ブロックの起振実験  
その8 起振実験および地震観測結果の再考察 ○下村幸男(日本大短大)・池田能夫・酒匂教明・川村政史・石丸辰治
- 20331 サブストラクチャ・オンライン応答実験による建物と地盤の動的相互作用に関する研究 ○田口智也(日本大大学院)・安達俊夫・松原宗佑
- 20351 セメント系砂質改良土の強度・変形特性 その11 破壊規準 ○山田雅一(日本大)・安達俊夫・太田 宏
- 20352 セメント系砂質改良土の強度・変形特性 その12 長期材齢における一軸圧縮強度の推定方法 ○太田 宏(日本大大学院)・山田雅一・安達俊夫
- 20421 ドーム型張弦シザース構造の構造特性に関する基礎的研究 その1 ドーム型張弦シザース構造の提案 ○櫻井優貴(山下設計)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・高橋厚人
- 20422 ドーム型張弦シザース構造の構造特性に関する基礎的研究 その2 等価断面力による荷重抵抗メカニズムの把握 ○高橋厚人(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・櫻井優貴
- 20423 展開式立方八面体(Cu-ron)の力学特性に関する基礎的研究 施工性向上に着目したジョイントの提案 ○竹内義典(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・森山卓也
- 20426 テンセグリック式切頂二十面体の提案と仮設空間への適用性について その1 構造システムの提案, 試行建設および風洞実験について ○森山卓也(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・森永信行
- 20427 テンセグリック式切頂二十面体の提案と仮設空間への適用性について その2 基本的構造性能の把握 ○森永信行(なわけんジム)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・森山卓也
- 20456 ETFE フィルムの張力膜構造への適用性に関する基礎的研究 ばねストラット式張力膜構造の提案 ○水野公義(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也
- 20457 4点突上げ式ホルン型張力膜構造のボンディング現象に関する基礎的研究 進行性ボンディング現象の実験的検討 ○川又哲也(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・韓 永輝
- 20458 4点突上げ式ホルン型張力膜構造のボンディング現象に関する基礎的研究 その2 数値解析による基本性状の把握 ○韓 永輝(織本構造設計)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・永井佑季
- 20460 レンズ型二重空気膜構造の強風時の構造挙動について その1 膜面の風圧測定と静的応答性状 ○藤川英哲(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・宮下正人
- 20461 レンズ型二重空気膜構造の強風時の構造挙動について その2 動的応答解析手法の提案および柔模型を用いた風洞実験 ○宮下正人(三菱地所設計)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・水野公義
- 20462 ホルン型張力膜屋根の風荷重に関する基礎的研究 ホルン型ユニットの連結配置の影響 ○永井佑季(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・吉野誠一・大森慎司
- 20463 片持式スタンドルーフの空力特性に関する基礎的研究 その1 風洞実験結果と数値流体解析結果の比較 ○吉野誠一(梅沢建築構造研究所)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・大森慎司・永井佑季
- 20464 片持式スタンドルーフの空力特性に関する基礎的研究 その2 屋根形状・スタンドの影響 ○小野 晋(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・吉野誠一・大森慎司
- 20465 片持式スタンドルーフの空力特性に関する基礎的研究 その3 風荷重低減方法の提案 ○大森慎司(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・吉野誠一・永井佑季
- 20469 集積型テンションヴォールト構造の構造特性に関する研究 その1 構造システムの提案とテンション材の配置による影響 ○藤原圭吾(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・廣石秀造
- 20470 集積型テンションヴォールト構造の構造特性に関する研究 その2 断面形状による影響と実大規模への適用 ○廣石秀造(構造計画プラスワン)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・藤木瑛子
- 20471 テンション材のアイエンド金物の強度に関する実験的研究 その1 設計手法の現状と基本力学性状の把握 ○柴山裕則(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・瀧口真衣子
- 20472 テンション材のアイエンド金物の強度に関する実験的研究 その2 金物形状による破壊性状の変化 ○瀧口真衣子(ピーディーシステム)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・柴山裕則
- 21333 学校施設における災害時の情報伝達システムの確保に関する研究 その5 千代田区の防災計画 ○酒匂教明(日本大短大)・安達 洋・安達俊夫・木原雅巳・田嶋和樹・仁平瑛士
- 21334 学校施設における災害時の情報伝達システムの確保に関する研究 その6 東京・丸の内地区の防災計画 ○大東宗幸(日本大大学院)・安達 洋・安達俊夫・木原雅巳・田嶋和樹・酒匂教明・仁平瑛士
- 21355 モード制御によるBMD設計法に関する研究 ○石丸辰治(日本大)・宮島洋平・牛坂伸也
- 21418 DMDを用いたトグル型制震システム その1 実大振動実験結果について ○宮島洋平(i2S2)・石丸辰治・秦 一平
- 21515 中間階免震を採用した共同住宅の免震改修 その1 性能図表を用いた性能設計 ○齊木健司(三井住友建設)・光阪勇治・古橋 剛・大杉文哉
- 21521 DM効果を利用した免震システムに関する基礎的研究 その1 DMVダンパーの性能試験 ○柳崎尚輝(日本大)・秦 一平・石丸辰治・古橋 剛
- 21522 DM効果を利用した免震システムに関する研究 その2 DMを有する免震システムの開発 ○秦 一平(日本大)・石丸辰治・柳崎尚輝
- 22158 伝統構法で建てられた鐘樓の制震改修について その1 制震改修の概要 ○魚津忠弘(魚津社寺工務店)・石垣秀典・石丸辰治
- 22159 伝統構法で建てられた鐘樓の制震改修について その2 制震改修後の性能に関する検討 ○石垣秀典(ハウスプラス住宅保証)・魚津忠弘・石丸辰治
- 22364 高軸力下における鋼構造露出型ピン柱脚の地震時挙動 ○中島 敏(鹿島建設)・半貫敏夫・秋山 宏
- 22384 実大鋼構造柱梁接合部の延性破壊―脆性破壊遷移実験 その4 接合部要素破壊実験 ○新井佑一郎(日本大大学院)・半貫敏夫・秋山 宏
- 22508 第1層柱脚が降伏する梁降伏型多層骨組の基準損傷分布則 ○小久保 彰(日本大大学院)・半貫敏夫・秋山 宏
- 22511 スリップ型復元力特性の柱脚を有する鋼構造梁降伏型魚骨骨組における最適強度分布 ○柳田佳伸(日本大)・半貫敏夫・秋山 宏
- 23011 耐震補強接合部における性能評価実験と解析的検証 その1 コンクリート―グラウト間におけるせん断挙動 ○増田久美子(日本大大学院)・宮崎紘光・藤城好将・横内 基・北嶋圭二・田嶋和樹・白井伸明



23012 耐震補強接合部における性能評価実験と解析的検証  
その2 鋼板-グラウト間におけるせん断挙動 ○宮崎紘光(日本  
大大学院)・増田久美子・藤城好将・横内 基・北嶋圭二・田  
嶋和樹・白井伸明

23013 耐震補強接合部における性能評価実験及び解析的検証  
その3 補強接合部におけるせん断抵抗機構の解析的検証  
○藤城好将(風間組)・宮崎紘光・増田久美子・横内 基・北嶋  
圭二・田嶋和樹・白井伸明

23037 廃棄物の基本物性と構造物への適用性評価に関する  
研究 その1 複合材置換率(Type VII) ○佐藤真介(商報舎)・  
岡村武士・岩田成子

23038 廃棄物の基本物性と構造物への適用性評価に関する  
研究 その2 細孔径と細孔構造 ○岩田成子(日本大)・岡村  
武士・佐藤真介

23064 3次元FEMによるRC造柱梁接合部に関する解析  
モデル確立へのアプローチ その1 実験概要と基本解析モデ  
ルの確認 ○白井伸明(日本大)・田嶋和樹・橋本 浩

23065 3次元FEMによるRC造柱梁接合部に関する解析  
モデル確立へのアプローチ その2 要素分割および切削鉄筋  
並びに付着すべりの検討 ○田嶋和樹(日本大)・橋本 浩・白  
井伸明

23066 3次元FEMによるRC造柱梁接合部に関する解析  
モデル確立へのアプローチ その3 付着応力度と圧縮強度低  
減の検討および標準モデルの提案 ○橋本 浩(日本大大学院)・  
白井伸明・田嶋和樹

23067 ファイバーモデルを用いた偏心RC造3層骨組の動  
的ねじれ挙動に関する解析的検討 その1 解析概要とねじれ  
復元力特性の検討 ○今井 究(日本大大学院)・河村 準・田  
嶋和樹・白井伸明

23068 ファイバーモデルを用いた偏心RC造3層骨組の動  
的ねじれ挙動に関する解析的検討 その2 解析結果と仮想偏  
心骨組によるねじれ応答の検討 ○河村 準(トータル・イン  
フォメーション・サービス)・今井 究・田嶋和樹・白井伸明

23087 鉄筋コンクリート梁のエネルギー吸収特性に関する  
実験的研究 ○芹澤次郎(西松建設)・半貫敏夫・秋山 宏

23104 開孔補強筋を使用したRC造有孔梁のせん断性状に  
関する実験研究 その1 実験概要及び開孔補強筋偏在配置に  
よる破壊性状への影響 ○三澤智史(東京工業大)・青田知己・  
香取慶一・三橋博巳・林 静雄

23177 スキャナを用いた変位およびひび割れ幅計測結果に  
基づくRC部材の損傷評価 その1 デジタル画像による変形  
計測の精度検証 ○石森昭行(日本大大学院)・杉 太地・田嶋  
和樹・白井伸明

23178 スキャナを用いた変位およびひび割れ幅計測結果に  
基づくRC部材の損傷評価 その2 せん断ひび割れ幅-せん  
断変形関係の定量的評価モデルの提案 ○杉 太地(三菱電機)・  
石森昭行・田嶋和樹・白井伸明

## 環境工学 I, II

40011 身体障害者の温熱環境に関する研究 XVII 頸髄損傷者  
の体温調節機能の特性 ○三上功生(東京理科大)・青木和夫・  
蜂巣浩生・武田 仁

40089 床仕上げ構造の床衝撃音レベル低減量の実験室測定  
方法について ○井上勝夫(日本大)・岡岡正人

40098 衝撃力特性(1)と(2)による床衝撃音レベルの対応性に  
関する検討 ○稲留康一(奥村組)・井上勝夫

40101 スラブの振動特性を考慮した乾式二重床の設置方法  
の検討 ○奥村晃史(日本大大学院)・山中一生・井上勝夫・富

田隆太

40104 歩行感からみた床仕上げ材のかたさ評価に関する検  
討 ○渡邊香保里(日本大大学院)・井上勝夫・富田隆太・渡部  
和良

40106 集合住宅の音環境を対象とした住まい方に関する居  
住者意識 住宅購入時の消費者要求と住宅性能表示制度:その  
10 ○野村奈央(日本大大学院)・井上勝夫・大室諒知

40107 集合住宅における住まい方の改善による発生音レ  
ベルの低減量に関する検討 ○大室諒知(日本大大学院)・井上勝  
夫・野村奈央

40119 円形音場における高密度散乱体を用いた拡散効果の  
検討 ○堀尾貞治(日本大大学院)・関口克明・羽入敏樹・星  
和磨

40136 上方反射音と側方反射音による空間印象の差異  
○佐藤瑠美(日本大大学院)・関口克明・羽入敏樹

40137 「音の抜け」に着目した演奏のしやすさに関するア  
ンケート調査 ○生方秀行(日本大大学院)・羽入敏樹・関口克明

40138 騒音下における反射音の初期と後期のエネルギーバ  
ランスが音声聴取に与える影響について ○小林秀彰(三井住  
友建設)・橋本 修・井上勝夫

40140 講演時における話者の「話しにくさ」に寄与する要  
因 ○小林 彩(日本大大学院)・橋本 修・井上勝夫

40142 騒音下におけるマスクラウドネス評価を用いた拡  
声音制御についての基礎的検討 ○関根嘉昭(日本大大学院)・  
橋本 修・井上勝夫・大澤邦昭

40156 人の動作及びボール衝撃による床振動応答加速度の  
検討 床振動測定用標準衝撃源としてのボールの有用性に関す  
る研究:その1 ○富田隆太(日本大)・井上勝夫・伊東 和

40157 人の動作とボール衝撃による床振動応答加速度の対  
応 床振動測定用標準衝撃源としてのボールの有用性に関する  
研究:その2 ○伊東 和(日本大大学院)・井上勝夫・富田隆太

40212 案内標識における景観への馴染みと視認性の両立に  
関する研究 ○大野裕明(日本大大学院)・加藤未佳・関口克明

40236 照明器具の設置高さ大きさが空間に求める明るさ  
に与える影響 ○加藤未佳(日本大)・関口克明

40245 住宅内における磁界強度の計測と実態評価 ○半崎  
亨(NEC ネットズエスアイ)・井上勝夫

40249 スリット状接続構造の電磁シールド性能基準化に関  
する実験的検討 その7 接続部断面性状の違いによる性能値  
の差異について ○吉野涼二(大成建設)・井上勝夫・三枝健二

40354 外壁線の後退した容積率緩和の高層建物が周辺空気  
質に及ぼす影響 ○森田英和(日本大大学院)・早川 眞・上原  
清

40462 鉄道駅における視覚障害者の触覚・聴覚情報利用に  
関するアンケート調査 視覚障害者の移動支援計画における聴  
覚情報利用に関する研究:その1 ○原田佳和(インクスエン  
지니어リングサービス)・浅野裕子・橋本 修・井上勝夫

40463 視覚障害者の鉄道駅利用に対するアンケート調査  
視覚障害者の移動支援計画における聴覚情報利用に関する研究:  
その2 ○浅野裕子(間組)・橋本 修・井上勝夫

41095 中国の都市住宅における暖冷房使用とエネルギー消  
費量の実態調査 ○姜 中天(東北大)・吉野 博・羽山広文・  
于リョウ・渡辺俊行・張 晴原・高 偉俊・吉野泰子・外岡 豊・  
熊谷一清

41256 伝統的養蚕型建築における温熱環境の実態とシミュ  
レーションに関する検討 ○吉野泰子(日本大短大)・王 岩・  
関口克明

41257 伝統的養蚕型建築における空気環境の実態とシミュレーションに関する検討 ○王 岩 (日本大大学院)・吉野泰子・熊谷一清・関口克明

41272 ソーラーチムニーを主体とする環境配慮型大学校舎の自然換気に関する研究 その5 チムニー内熱・換気特性に及ぼす構成材の影響 ○前坂彰子 (三建設備工業)・早川 眞

41332 濃度減衰換気測定法の統計的データ分析法 ○奥山博康 (清水建設)・吉野 博・加藤信介・倉淵 隆・早川 眞・内海康雄

41408 高層建築の自然換気のための壁面風圧均等化の実験 その3 ダブルスキンを持つ矩形建物模型の場合2 ○早川 眞 (日本大)

41632 リターンバイパス方式による置換空調の居住性と省エネルギー評価に関する研究 ○長谷川絢子 (日本大大学院)・早川 眞

## 建築計画 I, II

5175 高度医療を受療する子どもと家族の滞在施設の建築計画に関する研究 ○古谷聡子 (元日本大大学院)・野村 歡・八藤後 猛

5239 小学校建築の主要空間における発生音特性に関する検討 オープンプラン型小学校の音環境に関する研究:その10 ○貝瀬智昭 (東急建設)・井上勝夫・冨田隆太・松本久美

5240 小学校建築の教室空間における空間遮音性能に関する検討 オープンプラン型小学校の音環境に関する研究:その11 ○松本久美 (大成建設)・井上勝夫・冨田隆太

5265 大規模公共体育館におけるアリーナ空間の設営に関する研究 国立代々木競技場第一体育館における設営作業の事例分析より ○矢野裕芳 (日本大)・渡辺富雄・若色峰郎

5417 身体負荷から見た高齢者の便座立ち座り時に使用する手すりのあり方に関する研究(1) 膝痛のない高齢者の膝関節負荷から見た手すりのあり方について ○平山清美 (元日本大大学院)・橋本美芽・勝平純司・持田真之・高塩康洋

5488 認知症グループホームにおける火災安全実態に関する基礎調査 ○村井裕樹 (兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所)・志田弘二・八藤後 猛・野村 歡

5660 障害の種類別や使用補装具別にみた建築物の障壁による困難に関する研究 ○橋本彼路子 (スタジオ3)・野村 歡・八藤後 猛

## 都市計画

7067 市町村合併後における中心市街地指定に関する研究—中心市街地活性化法の改正を受けて— ○櫻井健太郎・櫻井恵介・平田直純・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也・川島和彦

7121 神田神保町の建物用途の変遷に関する研究 (その1) ○本郷寛和・泉山壘威・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也・川島和彦

7122 神田神保町の建物用途の変遷に関する研究 (その2) ○泉山壘威・本郷寛和・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也・川島和彦

7132 秋葉原地区における空間構成に関する研究—建物床用途の現状分析— ○木村麻里子・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也・川島和彦

7234 屋外広告物の構成要素とその判読に関する研究 ○宇於崎勝也・小嶋勝衛・根上彰生・川島和彦

7491 中国・トルファン市における歴史的街区保護に関する研究・その1 —街区保護計画と住民意識— ○ウシュルチナ

ルグリ・後藤将人・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也・川島和彦  
7492 中国・トルファン市における歴史的街区保護に関する研究・その2 —伝統的建造物と街路空間の実態— ○後藤将人・ウシュルチナルグリ・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也・川島和彦

## 建築歴史・意匠

9008 永祿6年の外宮式年遷宮について 中世伊勢神宮の造営組織に関する研究 その7 ○浜島一成 (日本大)

9074 クメール寺院建築の出入口技術の発展過程及びその構法の特徴に関する研究 プレ・アンコール期からアンコール初頭期 (7世紀初頭~10世紀末)のレンガ造遺構を中心として ○チエンラタ (日本大)・片桐正夫・坪井善道・重枝 豊・三輪 悟・大山亜紀子・小嶋陽子・三枝一義・石澤良昭・清水五郎・大川三雄・永松大作

9076 アンコール遺跡の平地式寺院建築における周壁及び回廊の構成について パンテアイ・スレイ、パンテアイ・サムレ、パンテアイ・クデイ、プリア・カーンを比較する ○加藤久美子 (日本大)

9077 12世紀末アンコール遺跡の配置計画に関する研究 EFEO 配置図比較による寸法体系の一考察 ○木下洋道 (日本大)

9078 バイヨン北経蔵における石積み工法に関する一考察 ジャヤヴァルマンⅦ世による施工技術の解明 ○長澤紘人 (日本大)・片桐正夫・石澤良昭・坪井善道・重枝 豊・三輪 悟・大山亜紀子・小嶋陽子・チエンラタ・永松大作・三枝一義

9080 王道調査概要とその現状について カンボジアのアンコール王国時代の王道と橋梁と宿駅に関する総合学術調査(6) ○片桐正夫 (日本大)・坪井善道・重枝 豊・三輪 悟・大山亜紀子・小嶋陽子・チエンラタ・三枝一義・石澤良昭・永松大作

9081 王道の施工技術に関する一考察 カンボジアのアンコール王国時代の王道と橋梁と宿駅に関する総合学術調査(7) ○三枝一義 (日本大)・片桐正夫・坪井善道・重枝 豊・三輪 悟・大山亜紀子・小嶋陽子・チエンラタ・永松大作・石澤良昭

9082 アンコール時代の古代橋について カンボジアのアンコール王国時代の王道と橋梁と宿駅に関する総合学術調査(8) ○永松大作 (日本大)・片桐正夫・坪井善道・重枝 豊・三輪 悟・大山亜紀子・小嶋陽子・チエンラタ・三枝一義・石澤良昭

9083 宿駅の配置と平面構成に関する一考察 カンボジアのアンコール王国時代の王道と橋梁と宿駅に関する総合学術調査(9) ○小嶋陽子 (日本大)・片桐正夫・石澤良昭・坪井善道・重枝 豊・三輪 悟・大山亜紀子・チエンラタ・三枝一義・永松大作

9084 東北タイにおける王道、宿駅、施療院の造営・整備に関する一考察 カンボジアのアンコール王国時代の王道と橋梁と宿駅に関する総合学術調査(10) ○大山亜紀子 (日本大)・片桐正夫・重枝 豊・畔柳昭雄・伊東 孝

9138 ダマーシュトック・ジードルンクにおける「キャビンシステム」の展開 ツァイレンパウ形式のジードルンクにおける住戸平面の近代化 その2 ○田所辰之助 (日本大)

9232 山越邦彦邸「ドーモ・ディナミック」と残存資料の調査概要について 山越邦彦研究・その3 ○矢代眞己 (日本大)・梅宮弘光・大川三雄・野沢正光・堀越哲美・土崎紀子

## 教育

13006 創造性を育む体験的建築教育 空間と構造を結ぶものづくり教育の試み ○藤木瑛子 (日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也

■中田捷夫氏（'65年度修了，中田捷夫研究室主宰）が『ぐんま国際アカデミー』により宇野亨氏（大同工業大学准教授），小嶋一浩氏（東京理科大学教授）他4名と連名で，水野吉樹氏（'85年度修了，竹中工務店設計部）が『竹中工務店東京本店新社屋』により菅順二（竹中工務店）他1名と連名で，栗原卓也氏（'94年度修了，日本設計建築設計群）が『マブチモーター株式会社本社棟』により前田啓介氏（日本アイ・ピー・エム）他3名と連名で，「2007年日本建築学会作品選奨」を受賞した。

■故吉田燦元教授，吉野泰子短大教授，関口克明教授，川西利昌氏が，「World Habitat Award 2006」（主催：Building and Social Housing Foundation）を受賞した。「The New Generation of Yaodong Cave Dwellings in the Loess Plateau」の研究に関する功績によるもので，全世界から書類審査と現地踏査を行い毎年2点が選出される。

■横村隆子短大非常勤講師，短大小石川研究室の「アクティブないえ いえといえの間をデザインする」が，「鎌倉市常盤住宅設計競技 最優良賞」（主催：関東甲信越建築士会ブロック会）を受賞した。良質な都市のストックとしての住宅をテーマに鎌倉市常盤に現存する敷地に2棟の住宅を提案するもので，39点の応募から選ばれた。

■小石川正男短大教授，高田康史短大副手，横村隆子短大非常勤講師，茶屋原梓さん（4年）の「ひとつの街としてのマンション（集住体）づくり」が，「マンションの安全安心アイデアコンペ 佳作」（主催：集合住宅維持管理機構）を受賞した。マンションライフフェア「集住博2007」の記念企画として，マンションの安全安心な暮らしをテーマに60点の応募から選ばれた。

■短大の「工学（技術者）基礎教育の充実と学習支援 学習意欲を啓発する

## 教室ぶろむなード

教育プログラムの実践」が，文部科学省の「平成19年度特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」に採択された。本取組は短大の教育課程を工夫改善する全体の申請であるが，特に短大建設学科の教育内容がヒアリングにて評価された。

■10月6日，1年生と建築学科教員の懇親を目的としたスポーツ大会が，東京ドームボウリングセンターで開催された。約100名の学生たちと教員がともに汗を流した後，駿河台キャンパス1号館カフェテリアへ移動して表彰式を兼ねた懇親会が行われた。



ボウリング大会後の懇親会

■高校生を対象としたイベントである「CST駿河台入試フォーラム」が7月15日に，「CSTオープンキャンパス」が29日に相次いで開催された。入試フォーラムでは白井伸明教授の学科オリエンテーション，佐藤光彦准教授によるミニ講義が行われた（三橋博巳教授によるミニ講義は台風により中止）。オープンキャンパスでは井上勝夫教授と山中新太郎助教によるミニ講義が行われ，数多くの高校生が来場し，立ち見が出るほどの盛況であった。また，学科紹介プログラムの会場には仮設のドームが建設され，音の響きを体験するコーナーが設けられた。そのほか，学生の設計作品の展示，コンクリートを素材としたものづくり，サーモカ

メラを用いた熱環境測定ツアーが行われ，多くの高校生で賑わった。



CSTオープンキャンパス

■8月26日～9月8日に富山県氷見市で開催されたサステイナブルアートプロジェクト「ヒミング・2007」の「歳再生プロジェクト」作品展示に，佐藤慎也研究室が『蔵メール』で参加した。石蔵リノベーションへの提案を一般から募集する参加型プロジェクトを行った。



蔵メール

■10月7日，学生まちづくりグループ「helpus!」の主催による「お茶の水アートキャンパス構想推進会議」が，大学と地域連携のイベント「第4回お茶の水アートピクニック」を開催した。このグループは，JR御茶ノ水駅前商店街「お茶の水茗溪通り会」と都市計画研究室有志を中心に設立されたもの。イベントでは，学生の力をまちづくりに注ぐことを目的に，スケッチ大会，フリーマーケット，まちなみウォークが行われ，その運営に3年生から大学院2年までの有志40名が参加した。



第4回お茶の水アートピクニック

●駿建目次				
(2007.11 Vol.35 No.3 通巻145号)	日本建築家協会 JIA 新人賞を受賞して	2	オリエンテーション報告	15
表紙「阿佐谷南の家」	NU 建築フォーラムから		2007年度 日本建築学会大会（九州）	
設計：小川広次	NU ARCHITECTURE WEEKへ	4	建築学科教室関係者発表論文リスト	16
撮影：新建築社	原寸大の模型をつくる	8	教室ぶろむなード	20
	第39回 建築学生海外研修旅行報告	10		